

History of Ethnic Classification and Categorization of the People of the Lower Amur Basin and Sakhalin from the Middle of the 19th to the End of the 20th Century

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004067

近現代のアムール川下流域と樺太における 民族分類の変遷

佐々木 史 郎*

History of Ethnic Classification and Categorization
of the People of the Lower Amur Basin and Sakhalin
from the Middle of the 19th to the End of the 20th Century

Shiro Sasaki

アムール川下流域から樺太（サハリン）にかけての地域に居住してきた先住民は、現在、ナーナイ、ウリチ、オロチ、ウデヘ、ネギダール、オロキ、エヴェンキ、ニヴヒの8つの民族に区分されている。しかし、このような民族分類と名称が確立したのは1930年代であり、それまでは様々な分類方法と名称が用いられていた。それは学術的な民族分類だけでなく、その成果を使った行政的な住民区分でも同様であった。本稿は1850年代にこの地域で本格的な人類学的、民族学的学術調査が開始されて以来の民族分類の変遷過程を明らかにすることを目的としている。従来の民族学的、歴史学的研究では、しばしば学術上の民族分類と行政上の民族的範疇との混同が見られ、この地域の先住民史研究の障害となっていた。そのことへの反省から、本稿では両者を厳密に区別することから出発し、行政、研究者、そして分類される住民の3者間の関係に焦点を当てる。それにより、現在の民族分類の学術的な背景と行政を通じたその住民自身の民族意識への影響を明らかにすることができる。

Indigenous people of the Lower Amur basin and Sakhalin are now officially classified into the following eight ethnic groups: the Nanais, Ul'chi, Orochi, Udegey, Negidals, Oroks, Evenks, and Nivkhi. However, such a classification was established only in the 1930s. Previously the people had been classified and named in various ways both by ethnologists and administrators. The purpose of this paper is to clarify

* 国立民族学博物館民族学研究開発センター

Key Words : ethnic classification, ethnic category, indigenous people, Lower Amur basin, Sakhalin

キーワード : 民族, 「民族」, 先住民, アムール川下流域, 樺太

the history of ethnic classification and categorization of the people of these regions. In previous historical and ethnological studies ethnological ethnic classification and administrative ethnic categories were often confused, and this confusion has been one of the obstacles to the progress of historical study of the indigenous people. In this paper I will strictly distinguish the two and focus on the relation between them and the ethnic identity of the people.

1 序論	4 20世紀前半における学術的民族分類の 深化
2 民族と「民族」	
3 アムール川下流域における学術的民族 分類の確立	4.1 19世紀までの民族分類の問題点
3.1 19世紀中期以前	4.2 ギリヤークとキレという呼称の由来 について
3.2 マークのアムール探検と民族分類	4.3 オロキ、オリチ、オロチの名称の由 来について
3.3 シュレンクによる民族分類	4.4 オロチとウデへの分離の可否につい て
3.3.1 分類基準	4.5 サマギールとキリを独立した「民族」 とするか否かについて
3.3.2 ギリヤーク	4.6 マークが提唱したゴリド(ナーナイ) 内部の3つのサブ・グループについ て
3.3.3 アイヌ	
3.3.4 オロキ	
3.3.5 オロチ	
3.3.6 オリチ(マンゴン)	
3.3.7 ゴリド	
3.3.8 ネギダール	5 民族から「民族」への転換
3.3.9 サマギール	
3.3.10 キリ	6 結論

1 序論

本稿では、アムール川下流域と樺太¹⁾に居住している先住諸民族に対する民族分類あるいは民族識別の変遷の歴史を明らかにすることを目的としている。より具体的には、研究者によって識別され、行政によって個人の戸籍の一部として登録され、そして住民自らが称する現在の民族がいかに成立したのかを明らかにするのである。そのために、本稿では次の3つの問題を設定する。

第1は、19世紀中期以来彼らを研究してきた人類学(特に文化人類学、以下「人類学」とは文化人類学を意味する)や民族学が彼らをどのような基準あるいは指標を使って民族という枠組みに整理したのかという問題である。現在ここで考察対象とするロ

上の民族分類がいかにかに成立したのかを明らかにするのである。

第2には、研究者の努力によって確立された人類学的あるいは民族学的な分類の枠組みが、いかにかに支配する国家の行政制度に取り入れられたのかを明らかにする。ロシア、ソ連の場合、研究者は必ずしも行政から完全に独立した存在ではなく、程度の差はあれ、民族政策を決定するための資料を提供するという役割を果たしていた（植民地を持つ国の人類学者や民族学者はそのような状況におかれることが多かったが）。行政が研究者の成果をいかにかに吸収し、また研究者側が行政の決定にいかにかに影響されていたのかを明らかにするのである。

そして第3に、研究者や行政が決めた民族分類と名称が、当の先住民自身にどのように受容され、彼らの自己意識（あるいは民族的なアイデンティティ）にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにする。人類学者や民族学者の民族識別は住民の自己意識からの影響を受けやすい。いかにかに言語や特定の文化要素などを指標として客観的に分類しようとしても、フィールドワークを通じて直接住民と接してしまえば、彼らの自他区別の意識が自然と分類指標の中に混入してしまう。したがって、フィールドワークに基づく分類は往々にして住民の自他区別意識を反映していることが多い。しかし、住民の意識が全く行政や研究の動向から影響を受けないというわけではない。特に帝政ロシアやソ連のように、民族を住民支配のための行政的な区分の1つとする政策を執る国の場合には、行政で定められた民族区分が逆に住民の意識を縛っていく。そしてそれが研究者に採録され、再びその研究成果が行政に吸い上げられるという循環が起きる。その過程をこのアムール川下流域と樺太の先住民を対象として明らかにするのである。

この3つの問題は、前の2つの問題が3番目の問題に収斂していく形で、お互いに深く関連しあっているために、個々別々に扱うことはできない。そこで、本稿ではまず第1の問題である研究史を縦糸にして、そこに第2の問題である行政の取り組みと第3の問題である分類される住民の意識とを横糸としてまぜながら論を進めていく。また、本稿では民族というこれまで様々な定義がなされてきた概念をキーワードとして使わなくてはならないために、その意味するところをある程度限定しなければならない。そのためにまず第1章ではこの民族という概念の本稿における定義付けを行う。そして、第2章と第3章において19世紀中期から現代の民族分類が確立される1930年代までの人類学者、民族学者による民族識別研究の歴史を振り返り、第4章において国勢調査に現れる民族分類のあり方を検討しながら、研究、行政、住民意識の3者の関係を明らかにしていく。そして終章で結論と今後の研究の展望を述べていきたい。

2 民族と「民族」

民族という概念の定義は、それを扱う研究者の数だけあるといっても過言ではない。今やそれは人類学や民族学の専売特許ではなく、社会学や政治学などかつては民族を扱うことが少なかった研究分野でも重要なキーワードとなってしまった。それは民族対立が冷戦崩壊後の世界においてイデオロギー対立に代わる新たな対立軸となり、緊急の解決を要する問題を数多く生みだしているからである。そのためにその概念の定義付けも、人類学者だけでなく社会学者や政治学者までもが試みていて、複雑になっている。

日本語の民族ということばは厳密な学術用語としては使用が避けられることもある。それは、この概念が英語の *nation*, *nationality*, *ethnicity*, *ethnic group* などの概念を混ぜ合わせたようなものであり（英語でもその定義は研究者の数ほどあるが）、分類の基準に統一性がなく、言語、宗教、形質などの集団の共通属性とともに帰属意識などが分類の指標として、使う人の都合にあわせてその都度使い分けられるという状況にあるからである。しかし、本稿はあえてこの言葉を使用する。というのは、英語の *nation* と *ethnic group* という区分では表せない、両者がないまぜになったそれこそ民族的な現象や集団が世界中に数多くあり、ロシア、ソ連の場合もその例外ではないからである。そもそもアメリカ、カナダ、西ヨーロッパなどの状況を説明するために定義付けられた両概念の区別が、政治的、経済的、社会的、そして歴史的背景を異にするロシア極東地域にそのままあてはまるわけがない。民族も日本で生まれた概念ではあるが、日本社会を説明するために生まれたのではない。あくまでも、人類を文化的、社会的に分類するための概念として導入されたのであり、*nation* と *ethnic group* といった2つの概念を使うよりも普遍性が高い。

しかし、本稿では学術上の民族という概念の変遷を振り返るようなことはしない。それは百科事典や文化人類学事典、民族問題事典などの民族に関係する項目や、あるいは民族問題の概説書といったものに任せることにする。紙幅の関係もあるが、筆者自身がまだ民族概念の歴史について十分整理ができていないからである。しいていえば、川田順造がその編著『民族とは何か』（岩波書店、1988年、福井勝義と共編）や『世界民族問題事典』（平凡社、1995年）の「民族」という項目で述べているようなことを出発点としている。すなわち、民族を定義する際にしばしば注目されてきた「民族意識」の成立過程を、二宮宏之が提唱した「共属感覚」と「共属意識」を区別する

ことから出発して、「〈自生的・文化的〉」と「〈作為的・政治的〉」という2つの力の拮抗と相互作用の中に見るといふ考え方を基礎にしている（川田・福井編 1988: 308; 川田 1995: 1117-1118）。これから分析するように、ロシア極東のアムール川下流域や樺太の先住民の場合にも、その民族は二宮のいう共属感覚に支えられた小さく自生的な *ethnos* 的性格と共属意識に支えられた作為的で政治的な *nation* 的性格を合わせ持ち、現象としても、人々の意識の中でも、また研究者の概念としてもその中間的な位置を占めて揺れ動いている。ただし、この地域の先住民の場合には「未開社会」のレッテルを貼られ、民族の設定に人類学者や民族学者がかかわり、さらにそこに行政が介入し、その結果がさらに「共属感覚」や「共属意識」を支えているため、川田の論考の上にさらに研究者と行政の介入過程を検討しなければ、この地域の民族的状況を理解できない。本稿ではそれを行行うのである。

そのために本稿では民族に関連することばに筆者独自の定義を与えて使う。結論からいってしまえば、読者にとっての視覚的な効果を利用して、民族と「民族」という2つの用語を使用する。

前者の鉤括弧のない民族は人類学や民族学において使われてきた概念とする。つまり学術用語としての民族である。その定義も数多くあるが、最大公約数的に広く捉えて、言語、文化、社会形態、そして帰属意識などを指標とする人類にとってきわめて重要と判断されている社会的な集団あるいは集団区分を表すことにする（これは井上紘一が『文化人類学事典』（弘文堂、1987年）の「民族」の項目で行った定義とほぼ一致する）（井上 1987: 750）。その中で近年重要視されているのが帰属意識であるが、その成立状況の説明は上記のごとく川田の論考に準拠する。

他方で、学術用語とは別に、国民や住民を分類整理して統治するための行政的な装置の中に民族という名称がしばしば使われている。その典型的な例が中国の「民族」であるが、ロシアの「ナーツィヤ」*нация*、「ナローディ」*народы*、「ナロードノスチ」*народность* なども民族と訳せる。政治学や社会学で取り上げられる民族は実はこちらの場合の方が多い。いわば民族的な装いを持った行政的な範疇であるが、日本語では民族としか訳せない。本稿ではこの行政的な範疇としての民族を人類学や民族学の学術的な民族と区別するために取りあえず鉤括弧でくくって、「民族」と表記することにする。つまり上で行った民族の定義はあくまでも研究上の概念としての民族であり、行政上の国民分類の枠組みの方は「民族」と表記するのである。この区別は本稿で扱うロシア極東地域やシベリアの先住民たちの状況を分析するのに欠かせない。しかし、あくまでもこの150年程の間ロシアという国家（その間に帝政、社会主

義、自由主義と政治体制は変化したが)の支配下におかれた歴史を持つアムール川下流域と樺太にいる先住諸民族の状況を説明するためにこの2つの概念と用語を使用するのであって、民族と「民族」の区分を地球規模で一般化するつもりはない。

実際の社会集団の1つとして民族といえる集団が形成される時、そこでは必ずその成員が自らその一員であることを意識し、民族的な自他区別を何らかの形で決定する。自他区別の指標として最もよく使われるのが言語の相違であるが、他にも宗教や政治形態、経済形態の相違を使う場合もある。あるいは、当事者以外には些細なことにしか思えないようなちょっとした文化上の違いを強調して自他区別の指標とすることすらある。民族に類する集団がまとまり、社会集団あるいは政治的な単位として成立するためには、少なくとも成員たちがその集団への帰属意識を共有している必要があるという意見に対しては、民族学者や人類学者だけでなく、歴史学、社会学、政治学など、民族と呼ばれる政治的集団を研究対象とする研究者たちの間でも異論は少なくなっている。

しかし、その結集の仕方、あるいはある民族への帰属意識の形成過程は様々で、決して一様ではない。例えばカリスマ性を持った少数の指導者が政治力と軍事力をもって人々を結集して、それを民族に類する集団に仕立て、国家建設の原動力とするケースもあれば、国家の中核を担う有力な人々によって区分され、枠組みを与えられた行政的な「民族」が、時とともにその中の人々の意識の中に定着して、帰属意識が共有されるようになり、人類学的に民族とみなせる集団になってしまうケースもある。

前者のように、ある有力者に指導されながら社会集団としての枠組みや帰属意識を成員たちが自主的に創り出し、その上に築き上げた民族的集団を核にして国家を形成する例は、内陸アジアや北アジアの遊牧民に典型的に見られる。すなわち、チュルク系の諸民族やモンゴルである。また、遊牧民ではないが満洲(満族)もその典型的な例の1つで、その形成過程は、時代が新しいために、かなり細かいところまで観察することができる。ただし、遊牧民の場合には中核となる民族的集団の形成と国家形成とが不可分の関係になっているために、国家が滅亡すると民族的集団の方も瓦解して離散することが多かった。中国の歴史書に登場する数々の遊牧集団、すなわち匈奴、鮮卑、柔然、突厥、回鶻、契丹などがそうである。

モンゴルがいまだに民族的集団として存続しているのは、チンギス・ハーンの帝国が分裂し、元朝や諸王朝が滅亡した後も、チンギス・ハーンの子孫たちを大ハーンに頂く国家形態が存続しえたからである(明代の北元や、内陸アジアからシベリア南部に展開していたモンゴル系、チュルク系の諸ハーン国を指す)。また、清朝やロシア

帝国など17世紀以降彼らを支配した国家から「民族」として認められて、その結果集団としての枠組みと名称の存続が許されたことも存続要因の一つだろう。満洲は清朝滅亡とともに民族存亡の危機に立たされたが、中華人民共和国成立後、55の政策的な「少数民族」の1つと認定されたために、息を吹き返し、やはり現在まで生き残ることができた。

このような民族を中核にして国家を築いた人々が遊牧民だけではないことはいうまでもない。ヨーロッパにおける絶対王政は支配者である王侯貴族の間に民族的集団への帰属意識がなければ成立しなかったものであり、市民革命後の近代国民国家の成立にはそのような意識の民衆への浸透が必要だった。せいぜい藩レベルの帰属意識しかなかった日本列島（北海道の大部分を除く）の住民も、幕藩体制の崩壊以後は、明治政府と一部の知的エリートによる強制や教育効果が大きかったとはいえ、結局は「日本民族」という枠組みの中に結集していく。ただし、近代国民国家の中核をなす民族の多くはその集団としての枠組みをその成員自身が創ってきた場合が多い。

それに対して、これから検証するアムール地域や樺太の先住民の場合では、民族運動の単位となる集団が国家に規定された行政的な「民族」であり、それが人々の民族的な帰属意識の対象となっている。したがって、この地域の先住民は、政治的な自治や経済状態の改善、そして「伝統文化」や「固有言語」の復興など、表面的にはどこの民族運動とも似たような要求をスローガンとして掲げながら運動しているが、その民族集団の由来は自力でその枠組みを築いてきた人々の民族とは異なる。二宮の概念を援用してその違いを説明してみると、成員が自力で社会集団としての枠組みを創ってきた民族は、「共属感覚」に支えられた「自生的・文化的」な性格の強い集団に由来し、国家建設や民族運動のような政治的な活動を展開するために「作為的・政治的」性格を強め、それによって「共属意識」に支えられた集団になったといえるだろう。それに対して、行政的な「民族」のような支配者から与えられた枠組みから出発した民族の場合には、始めから「作為的・政治的」な性格の集団である。ただし、「民族」がその成員の「共属意識」に支えられた民族に変貌した時点で、同じ「作為的」でも作為の主体が入れ替わっている。すなわち「民族」の作為の主体は国家や行政であるが、民族となるとそれはその成員自身である。

アムール地域や樺太の先住民を支配下に治めていたソ連は、国内の諸民族（実際には行政的な「民族」として分類し直していたが）に「ナーツィヤ」*нация* と「ナロードノスチ」*народность* という2段階のランクを付けた（詳細は田中（1978: 191-192）を参照）。ナーツィヤと規定された「民族」はその民族の名称を冠した「共

和国]、「自治共和国」、「自治州」といった政治組織を結成することができたが、ナロードノスチと規定された民族はせいぜい「民族管区」（後に「自治管区」と改名）や「民族地区」といった州の下のレベルの行政単位にその名前を付すことができるだけであつた。そして、その認定基準をシベリアやロシア極東の先住民の事例から帰納的に割り出してみると、ナーツィヤには社会集団としての枠組みを自力で構築し、帝政時代から積極的に政治運動を展開していた民族が選ばれていることが多い。したがって、ナーツィヤの場合には帝政時代以来の民族とソ連政府が規定した「民族」との間の乖離が小さい。シベリア・極東地域でもブリヤート、ヤクート、トゥヴァなどは自治共和国の結成が認められてナーツィヤとされた。それに対して、ナロードノスチとされた人々は、彼ら自身が自覚していた民族的な集団は「民族」とは認められず、研究者の調査結果をもとに行政的な「民族」に分類し直されたケースが多かつた。いわば、ナーツィヤは一人前の「民族」だが、ナロードノスチは一人前とは認められない「民族」だったわけである。そしてアムール川下流域と樺太の先住民は「北方少数民族」（ナロードノスチ・セーヴェラ народности Севера）と認定された。

しかし、70年を越えるソ連の支配を経ると、行政的に決定された「民族」の枠組みが次第に人々の意識に定着し、彼らを束縛するようになる。それは「ナーツィヤ」とされた人々だけでなく、「ナロードノスチ」とされた人々にも及んだ。ペレストロイカ時代（1985年～91年）以降、政治的な「民族自立運動」あるいは「民族」単位の「伝統文化」の復興運動が展開されたが、その単位となつたのがナーツィヤやナロードノスチであつた。当初は政府が「作為」の主体であつたナロードノスチも、その主体が成員自身に移り、「共属意識」の対象とされるようになったのである。つまり、「民族」の民族化であり、それはまたナーツィヤとナロードノスチを区別しようとするソ連式「民族」類別の破綻も意味する。その典型的な事例が東北アジアの一部であるシベリアやロシア極東に現在住んでいる「北方少数民族」たちなのである。

現在の「民族」にはほとんど反映されていないが、彼ら自身にも前々から言語や他の文化要素、あるいは政治的な力関係に基づく独自の集団レベルでの他区別、さらには他者分類が存在した。それは一見、二宮がいう「共属感覚」に基づく「自生的・文化的」な集団に見えるが、川田がいうように、多分に集団間の政治的な力学が働いていたことも事実だろう。例えば、シロコゴロフ S. M. Shirokogoff (C. M. Широкогоров) の記すところによれば、「北方ツングース」と呼ばれていた諸集団の間には、地域ごとの下位集団が多数有り、それぞれ自らこそ「エヴェンキ」（つまり純粋なツングース）だと思つていたというのである。彼が列挙している例を引用する

と、バルグジン・ツングース（トナカイを飼う集団の1つ）は自分たちが純粋なツングースであると考え、遊牧ツングース（牛や馬、羊を飼い、モンゴルの遊牧生活を送る人々）はブリヤートの強い影響下に入ってしまった集団とみなし、一部の良好な関係にある集団を除いてエヴェンキとは呼ばない。しかし他方で遊牧ツングースは、ツングース語を保っていれば自らをエヴェンキと考え、逆にトナカイ・エヴェンキは「森林の中を獣の如く彷徨している野蛮人」とみなすという（シロコゴロフ 1941: 201）。つまり、研究者が一括してツングースあるいは「北方ツングース」と呼んでいた集団の中にも、彼ら自身の自他区別に基づく集団が厳然と存在していた。

シロコゴロフは「北方ツングース」のある集団を中心にして、近隣諸集団との関係を語るという記述方法をとっていないために、例えばバルグジン・ツングースの近隣の遊牧ツングースへの意識とモンゴル、ブリヤート、ダフルなどへの意識との差違が今一つはっきりしない。しかし、今日の見方でシロコゴロフが調査した当時の北方ツングースの状況を見直せば、彼がいうバルグジン・ツングース、ネルチンスク・ツングースといった集団が民族に相当し、「北方ツングース」とは同系統の言語（北方ツングース諸語）を話す人々をまとめた研究上の分類枠（帰属意識が全員に共有されていないので民族とはいえない）である。実際、彼がバルグジン・ツングースなどと同レベルの集団として挙げていた「クマルチェン」、「ビラルチェン」といった集団は人類学者や民族学者たちに他の遊牧ツングースやトナカイ・ツングースとならぶ別個の民族とみなされていた（例えば後述のように、シュレンク L. Schrenck は「ビラルチェン」に相当する人々を「ビラル」と呼ばれる独自の民族であるとしている）。また「ソロン」と呼ばれる遊牧ツングースのグループも、中華人民共和国成立後に行われた「民族識別工作」（国家による民族の認定作業）までは独自の民族とされていた。ただし、シロコゴロフ自身はバルグジン・ツングースやネルチンスク・ツングースをクマルチェンやビラルチェン、ソロンのように独立した民族とはみなさず、「北方ツングース」という1つの民族の下位集団としている。

しかし、現在の中国とロシアにおける北方ツングース諸民族の分類は、シロコゴロフの分類とも、彼ら自身の自他区別とも異なる。すなわち、中国側では「エウェンキー」/əwəŋki:/（実は「エヴェンキ」というのはこのエウェンキーのロシア語表記が元になっている）という共通の自称を使用することと、「民族識別工作」の際に同じ民族であったと認識しあったということに基づいて、かつてのソロン、ロシアやモンゴルから中国領に移住してきたハムニガン、そして中国東北地方北部のトナカイ・ツングース（かつて馴鹿オロチョンと呼ばれたこともある）を「鄂温克族」（日本語ではエヴェンキ

族、エベンキ族、エウエンキ族などと記される)としてまとめ、エウエンキーに類する自称を持たないかつてのピラルチェンやクマルチェンとシロコゴロフのいう「興安ツングース」らを「鄂倫春族」(同じくオロチョン族)にまとめて、かつての「北方ツングース」を2つの「民族」に分けてしまった²⁾。他方、ロシア側はかつて「ツングース」と呼ばれた人々を一括して「エウエンキ」(Эвенки)と呼ぶことにして³⁾、シロコゴロフらが認めた地域的、方言的な各種集団はあくまでも下位集団、そして言語の違いは方言的な差違であるとした。

ここで例として挙げた東北アジアの北方ツングースの場合、中国やソ連がその民族政策の中で定めた行政的な「民族」がどの程度まで当の人々の意識に定着したかは問題である。実際、1993年の夏に中国内蒙古自治区呼倫貝爾盟陳巴爾古旗の鄂温克索木(エウエンキ・ソム)で調査を行った時、ナーダム(夏の民族の祭典)に参加していたトナカイを飼う鄂温克族(中国では雅庫特鄂温克ヤクト・エウエンキと呼ばれる、かつて日本側に馴鹿オロチョンと呼ばれたグループの子孫)の人々に話を聞いたところ、遊牧をする他の鄂温克族の人々との意識の違いを知ることができた。彼らは索倫鄂温克(ソロン・エウエンキ)、通古斯鄂温克(ツングース・エウエンキ、ハムニガンとも呼ばれる)と呼ばれる遊牧集団とは言語的にも文化的にも大きく違うということ意識しており、人によっては「鄂温克族の文化」、「鄂温克族の言語」として遊牧民たちの文化や言語が標準化されることを恐れていた。したがって、彼らの場合には国家が与えた「民族」の枠組みが帰属対象として彼らの意識にまだ完全には定着していないといえるだろう(佐々木 1995)。

しかし、これから民族と「民族」の成立過程を見ていくアムール川下流域や沿海地方、そして樺太の場合、事情はかなり異なる。ここの「少数民族」あるいは「先住民民族」の間では、人々の集団帰属意識とは離れたところで設定された「民族」がソ連時代の70余年を通じて人々の意識の中に浸透し、定着して、現在では身分証明書(パスポート)に書かれている「民族」への帰属が自己の重要なアイデンティティの1つとなっているのである。住民が帰属を意識する民族的な集団と人類学者が設定する民族、そして行政上の「民族」の3者の関係は非常に微妙である。行政的に設定された「民族」と住民の意識やそれを重視する現在の人類学の民族とが一致しないのは当然とも思われるが、行政は民族学者や人類学者の調査成果に基づいて「民族」分類をしているのであり、実は「民族」は民族を基礎にして設定されていることが多い。また、先に触れたように、「民族」が人々の意識の中で民族化して、それがまた研究者を通して行政的な「民族」に反映されていくなど、3者の関係は一筋縄ではいかない。さら

に、人類学における民族の概念も時代ごとによって変わり、住民の意識や「民族」との関係も複雑に変化している。

次章以下では、19世紀中期から20世紀末期までの人類学や民族学による民族分類の変遷と行政による「民族」設定の変遷とを追っていくが、住民の集団帰属意識と学術的な民族分類、そして行政的な「民族」の3者の微妙な関係もその過程で明らかになっていくはずである。それは本稿の結論の中核部分をなすことになるとともに、今後、アムール川下流域や樺太を含むロシア極東地方南部と中国東北地方の少数民族、あるいは先住民と呼ばれる人々の祖先たちの姿を記録した文書類を分析する際の理論的な基礎となるはずである。この地域の先住民たちの現在はその過去の歴史を明らかにしなければ正當に理解することはできない（それは先住民だけでなく、移民についても同様であるが）。本稿での作業はそのための基礎作業なのである。

3 アムール川下流域における学術的民族分類の確立

3.1 19世紀中期以前

アムール川下流域と樺太の住民に関する人類学、民族学方面からの本格的な調査研究が始まったのは、19世紀の中期からである。しかし、ヨーロッパではそれ以前にもこの地域の住民とその文化に対する関心があった。例えば、既に17世紀末期にはオランダの学者ウィッツェン N. Wittsen によってこの地域の概況が紹介され、18世紀前半に出版されたデュ・アルド J. B. Du Halde の著作には1709年に康熙帝（清の第4代皇帝、聖祖、在位1662-1722年）の命令で東北地方からアムール川流域にかけて各地を実測して歩いたイエズス会士レジス Regis の報告が載せられている（Du Halde 1735）。また、18世紀中期のロシアの歴史学者ミルレル G. F. Müller (Г. Ф. Миллер) は17世紀のコサックたちによるアムール遠征の記録や古文書を筆写してペテルブルクに持ち帰り、ロシアのアムール征服史を描いている（Миллер 1757a; 1757b）。

18世紀末から19世紀になると、北京にあったロシア帝国の代表部（北京城の南部と東北の隅の2箇所にあった）に派遣された「北京伝導団」と呼ばれた一群の聖職者たちの中から中国の文書を研究する者が現れ、ロシアの東洋学の発展に大いに寄与した（吉田 1974: 195-209）。そして、彼らがロシアに持ち帰って研究した文書の中にもアムール関係の文書が含まれていた。例えば、北京伝導団の代表者（掌院）の1人で

あり、ロシア東洋学の基礎を築いたイアキンフ・ビチューリン **Иакинф Бичурин** (1809年から20年まで掌院を務める) はその主著『中華帝国の統計的研究』においてアムール方面の住民について言及している。また、17世紀のアムール地方の住民についての記述も含まれている『八旗通志』が既に1784年にはロソーヒン **И. Россохин** とレオンチェフ **А. Леонтиев** によってロシア語に翻訳され、呉振の『寧古塔紀略』も1857年に東洋学者ヴァシーリエフ **В. П. Васильев** によって翻訳されている (Бичурин 1822; Россохин и Леонтиев 1784; Васильев 1857)。ロソーヒン, レオンチェフ, ヴァシーリエフはいずれも北京伝導団の一員として北京に滞在して研究した経験を持つ。

ウィッツェン, ミルレルらは、17世紀のロシアの探検家ポヤルコフ **В. Поярков** らの報告により、松花江からアムール川河口にかけての住民をジュチェリ **Jucheri** (Джучери または Дючери), ナトキ **Natki** (Натки), ギリヤーキ **Gilyaki** (Гиляки) の3つに分類したが、デュ・アルド, ビチューリンらは満洲や漢族の呼称に則り、同じ住民をユピターズ **Yupi Taz**, ケチェン・ターズ **Kechen Taz**, フィヤッタ **Fiyatta** など呼んだ。

しかし、それらはいずれも研究者自身が調査をして集めた記録によるものではなく、そのために彼らを用いた基礎史料の紹介に終わっている場合が多い。というのは、ロシア人が初めてアムール地方に到達した17世紀当時はまだその地方を研究するという素地がロシアにはなく、18世紀になってロシアにも學術水準の向上が図られるようになった頃には、1689年にロシアと清の間で締結されたネルチンスク条約によってアムール地方から締め出されていたためである。したがって、民族学、人類学の基礎的な素養を持った研究者が自ら現地調査に赴き、自分の目で確かめた資料をもとに当該地域の住民の生活、文化、社会、宗教などを論じるようになるのは、19世紀中期、つまりアムール川流域における清朝の支配が衰退し、その結果この地域がロシアやヨーロッパの探検家、研究者に開放されてからである。

ただし、18世紀末期から19世紀初期にかけての時代に、必ずしも民族学的な著作ではないが、自らの足で集めた資料、または隣接地域のインフォーマントから聞き集めた資料を用いた記録はある。それは最上徳内, 中村小市郎, 間宮林蔵, 松田伝十郎, 松浦武四郎ら江戸時代中・後期の日本人の調査記録である。彼らはすべて樺太で実際に生活し、住民から聞き取り調査を行っている。さらに、間宮林蔵は隠密裏にはあるが大陸側に渡り、アムール川下流域の住民についても調査している。

彼らの調査記録の優れた点は、当の住民自身の自他識別を伝えている点である。そ

れは研究者や国家が行う民族識別とは性質が当然異なる、いわば樺太の住民たちのイーミックemicな民族識別である。例えば、中村小市郎は交易のために大陸から樺太にやって来た、当時日本人に「サンタン人」と呼ばれた人々から大陸における住民構成とその分布について聞き出している。それによれば、樺太西海岸からアムール川最下流域には「スメレンクル」と呼ばれる人々が住み、その上流にはサンタン人が、さらにその上流には「コルデッケ」と呼ばれる人々がいたという。そして、さらにその奥、つまり松花江方面には満洲があり、アムール川の上流はロシアの領土であったという。また、樺太には中部から東海岸にかけてヲロコ（ヲロッコ）が、現在のティミ川流域から東海岸北部にかけてはニクブンあるいはルモウと呼ばれる人々がいた（中村 1801）。これらの情報は間宮林蔵が実際に樺太やアムール川下流域を探索することで確かめられ、さらに、アムグニ川の奥にイダー（ネギダールのことだといわれる）、アムール川の左岸の支流沿いにキーレン、より南の日本海沿岸からシホテ・アリニ山脈方面にキヤカラと呼ばれる住民などがいたことが確認されている（間宮 1988）。

江戸時代の日本人が記録した住民の名称はいわば住民どうしの相互呼称のようなもので、住民の間で意識された民族的な境界（バルト F. Barth のいうエスニック・バウンダリー ethnic boundary）が反映されていると考えられる（Barth 1969）。当時ヨーロッパでは中国側の資料の紹介とロシアの探検家たちの記録を整理することに終始していたことを考えあわせると、この時の日本の業績は高い水準にあったといえる。彼らが行った民族分類はその後幕末まで事実上行政的な「民族」として日本の樺太支配に利用されるが、最上徳内と間宮林蔵の著作はシーボルト F. von Siebold によってドイツ語に翻訳されてヨーロッパ、ロシアに紹介され、研究者の間で反響を呼んだ。以下に紹介するマーク、シュレンク、パトカノフらのアムール地方の民族学の創始者たちもシーボルトが翻訳した最上徳内や間宮林蔵の著作の恩恵に与っているのである（マーク 1972; Шренк 1883; Патканов 1906）。

3.2 マークのアムール探検と民族分類

1689年に清との間に締結されたネルチンスク条約によってロシアは一度アムール地方から締め出されたが、それから150年たって再びこの地方に接近する機会を得る。ロシアでは、18世紀よりカムチャツカ半島、アリューシャン列島、そしてアラスカの植民地経営が進展するに伴い、アムール川をそこへの通路として利用すると同時にシベリアへの食料供給基地にもしようという意見が生じていた。そのために既に1805年



図2 アムール川沿岸の住民たち (Маак 1859:фиг.17)
1～5 マネギール, 6～7 満洲, 8～12 ゴリド, 13 マングン, 14～15 ギリヤーク

にはクルーゼンシュテルンが艦長を務めたナジェージュダ号が樺太近海まで調査に来ている。しかし、結局中国側を刺激したくないロシア政府の意向もあり、アムール川の河口までは接近できず、樺太と大陸の間の海峡も確認できなかった(洞 1973: 35)。

最初にロシア人によるアムール地方の住民に関する学術調査を行ったのは、ミッデンドルフ A. F. Middendorff であった。彼は、1842年以来続けてきたシベリアの動植物に関する学術調査の最後の1844年に、約4カ月にわたってスタノヴォイ山脈の分水嶺を越えてトゥグ川流域やアムグニ川の上流方面を旅行した。そして、アムール川河口周辺が中国側に放置されたままで、艦隊などおらず、また地元のギリヤークなどの住民には中国に服属しているという意識などないと報告した(満鉄弘報課 1942: 313-314)。その報告は当時の皇帝ニコライ1世の関心を喚び、1847年に露米会社に調査命令が出されたが、失敗に終わっている。しかし、1849年にはネヴェリスコイ Г. И. Невельской が政府の許可なしに探検を強行し、樺太と大陸の海峡を確認した。そしてこれを皮切りにロシアはアムール地方を植民地化するための既成事実を着実に積み上げていく(満鉄弘報課 1942; 秋月 1994: 65-66)。その過程で民族学者、生物学者、地質学者らによる本格的な学術調査が始まるのである。

この時代にアムール地方の住民の民族構成に関する情報を詳しく伝えた研究者、探検家、軍人は、ボシュニャーク Н. К. Бошняк, シュミット Fr. Schmidt, グレン P. Glehn, ヴェニューコフ М. Венюков, ブッセ Н. В. Буссе など枚挙に暇がない。今日アムール地方の住民として知られている民族名は既にそれより前にこの地方に時折秘かに入っていた一部のロシア人やツングース系住民からの情報によってもたらされていたが、これらの研究者たちの調査によって正式に確認された。しかし、そこには情報不足や民族学の知識の欠如による多くの錯覚や事実誤認、混乱が見られた。

それらを整理し、系統だてて記述したのがマーク P. K. Маак とシュレンク L. von Schrenck(または Л. И. Шренк) であった。この2人の研究成果は長らくこの地域の民族学の古典となり、基礎となった。

マークがアムール川流域を調査したのは1855年のことである。この時の記録は彼の著書の1つである「アムール紀行」(*Путешествие на Амур*, СПб., 1859)としてまとめられた⁴⁾(図2)。

彼が旅行したのはシルカ川がアルグン川と合流してアムール川となる地点から当時ロシアの橋頭堡的要塞があったキジ湖畔のマリーンスクというところまでであるが、本稿で対象とする地域は松花江河口から下流の部分である。彼が松花江下流でまず出会ったのは「キレング」と自称する「ツングース族」であった(図3)。彼らは松花

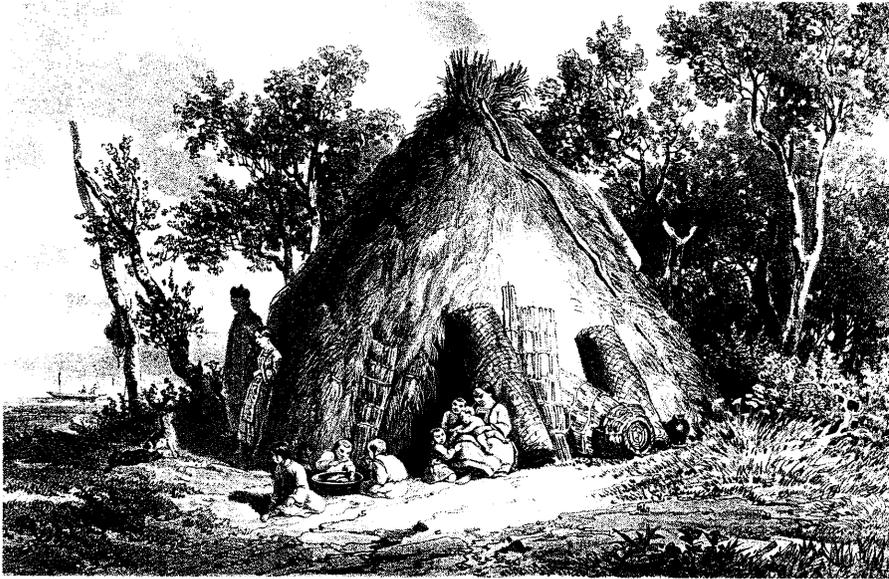


図3 松花江河口の住民 (Маак 1859:фиг.6)

江とアムール川の流域に住み、ウスリー川河口へ行く途中のアムール川右岸の集落ホロッコーというところでホゼングと称する人々と接していたという。キレングは自分たちのことを「ゴリド」とは称さなかったようだが、マークの考えでは、彼らはもっと下流にいるゴリドと同一民族をなしていたことは疑いないという。両者の違いは、キレングが満洲の影響を色濃く受けていることにあり、彼らの習俗には「狩猟と漁撈を生活手段とする半未開民族であるゴリド族の生活から、農耕民族としての満洲の文化的生活への転移が明白に観察される」(マーク 1972: 172-173) というのである。

キレングの地域の下流に隣接しているホゼングはさらにウスリー川河口付近でゴリド(図4)と接しているが、彼らの習俗もまたゴリドの習俗となんら変わるところがなかったという。彼はこうしたことから、「ホゼング族はおそらく1つの独立した民族というのではなく、多くの人口を有するゴリド族の支族であるに過ぎないと思われる」(マーク 1972: 190) と結論付けている。

このキレング、ホゼング、ゴリドという集団は、マークが住民の自称に基づいて設定した分類であり、そこには住民自身が意識する自他区別、あるいは集団区分を認めることができる。しかし、マークは、この3つの「民族」の習俗を詳しく観察したわけではないのでその相違を明確にすることはできなかつたと断わっているものの、これらはすべて「ゴリド」(今日のナーナイの旧称) という大きな民族の一部ではない



図4 犬ぞりに乗るゴリド (Маак 1859:фиг.9)

かという考えを随所にほめかしている。それは、印象とはいえ、彼がこの3種の住民に共通の文化要素を見いだしたことに基づく結論であり、その意味で、これら3つの集団を包含した「ゴリド」という民族の設定は客観的な民族の設定ということになる。この広義の「ゴリド」という民族の設定はシュレンクラに支持されてその後長く定着するが、それは19世紀中期の民族学では客観主義的な民族分類が主流だったためである。

このキレング、ホゼング、ゴリドという3つの集団の存在は後の研究者には十分確認されず、彼らを大いに困惑させる結果になった。しかし、次の章でも詳しく述べるが、近年言語学の方面からこの問題が新しい展開を見せつつある。現在のロシア領アムール川下流域のナーナイ語（ゴリド語）や中国領の赫哲族の言語を研究する風間伸次郎によれば、中国の赫哲族の言語である赫哲語は「奇勒恩方言」（奇勒恩はキレンと読める）と「赫真方言」（赫真はヘジェンまたはホジェンと読める）の2方言に分類できるが、両者はその語彙と文法の面から別の言語と認定できるほど異なっているという。そして赫真方言はロシア領のナーナイ語とほとんど同じなのに対して、奇勒恩方言の方は同じロシア領のウデヘ語やオロチ語に近いという。そして、それと同時にまた満洲語の影響も色濃く受けている（風間 1996a）。つまり、マークが指摘していた「農耕民族としての満洲の文化的な生活への転移」が言語的にも認められるのであ

る。さらに、その「キレング」という名称がアムール川本流の住民がアムール川左岸支流のツングース系住民に対して使う呼称である「キレ」、「キレン」に近いことから、彼らはその地方からの移住者である可能性が高い。マークが指摘した松花江における「キレング」と「ホゼング」との類別は、この地域の民族分類を混乱させるどころか、現在の中国領にいる赫哲族の成立史を知る上で重要なキーポイントとなるのである。

この3つの集団を包含すると定義された「ゴリド」の土地で、マークはさらに2種類の住民についての情報を得ている。1つはゴリドたちの間で「キレール」（または単に「キレー」ともいう）と呼ばれている人々で、彼らが遠く森の奥へ狩猟に出かけた際に交易することがある。マークの情報ではこのキレール族の習俗はホゼングのものと変わるところはなく、交渉の際に互いに自由に自民族語をもって話し合うことができる。そして、彼らは狩猟と漁撈を生業とするツングースの1種で、アムール川左岸の支流ゴリン川の沿岸に居住し、ロシア人には「サマゲル」と呼ばれているという（マーク 1972: 184）。マークのこの判断は後年シュレンクによって修正される。シュレンクはキリ（マークのいうキレールに当たる）とサマギール（サマゲル）を別個の民族として扱っているからである。しかし、ゴリン川というアムール川左岸の支流にいたはずのサマギールも中国側から「キレール」に発音が近い「奇勒爾」⁹⁾と呼ばれていたことがあり、マークの指摘は必ずしも間違いではない。

もう1つは、彼がドンドン川（現在はアニュー川と呼ばれる）下流で出会った「ナートカ族」という人々である。彼らについてマークは、顔の形がゴリドとやや異なり、ツングース語を話す、発音が全く異なる言葉であり、ゴリドのように前頭部の髪を剃っていない、つまり満洲式の弁髪を結っていないといった点を指摘している。彼らの居住域はアムール川の本流沿いではなく、そこに流れ込む小さな支流沿いであり、彼ら自身は「ゴリド」と称するが、周辺の人々が彼らを指して「ナートカ族」という（マーク 1972: 196-197）。

この2種類の人々の存在は非常に興味深い。というのは、キレールの場合、習俗は近く、言語も互に通じる程度であるのに、互いに区別しあっていることになる。それに対し、ナートカの場合は自ら「ゴリド」と称し、そこにアイデンティティを求めているながら、習俗、言語にアムール川本流のゴリドたちとは異なる部分があり、さらに他のゴリドから「ナートカ」と呼ばれて区別されている。この2つの事例はこの地域の民族的状況をよく反映している。

すなわち、キレングやホゼング、キレールの場合には客観的立場からいえば同一の

民族とすることができるが、彼ら自身の識別からすれば別の民族をなすことになる。一方、ナートカの場合は、自分たちは「ゴリド」だというアイデンティティを持っているのに対し、アムール川本流のゴリドがそれを認めないという関係にある。そこには本流住民の支流住民に対する差別意識が見られる。

この「ナートカ」という名称は、17世紀にポヤルコフらがジュチェリの下流で遭遇した「ナトキ」の場合と同じく、ネギダールやエヴェンキらが現在のウリチ、アムール川下流ナーナイを指して使う名称であるガトク **Гатку** (より正確には **gatku**) に由来するはずである。しかし、その名称がなぜアムール川本流の住民のドンドン川流域住民に対する呼称となったのかは不明である。現在「ナートカ」は民族として研究者の間で認められていないだけでなく、先住民間の相互呼称の1つとしても確認できない。

マークによれば、アムール川沿いの民族構成はゴリン川河口を境にしてゴリドから「マングン」に変わる (マーク 1972: 207) (図5, 図6, 図7)。「マングン」または「マングー」という呼称は、彼らがアムール川のことを「マングー川」と呼んでいたことに起因し、それをロシア人が採用したといわれるが、彼ら自身は自らを「オリチ」と称しているという (マーク 1972: 210)。彼の観察では、このマングン族の分布範囲はゴリン川河口より若干下流の村「ニュングニュ」からアムール川河口より200露



図5 マングンたち (Маак 1859:фиг.11)

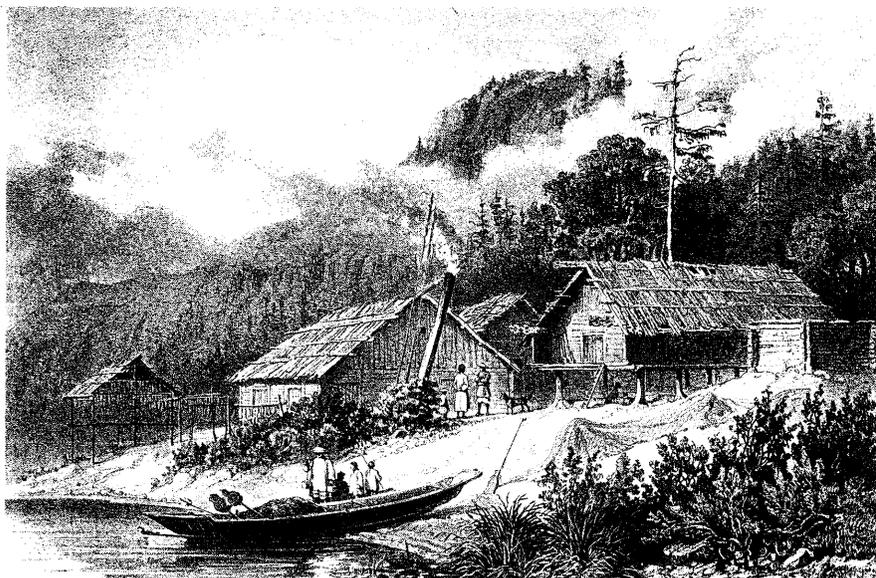


図6 マングンの冬の家 (Маак 1859:фиг.12)



図7 マングンの家の中 (Маак 1859:фиг.13)

里(約 213.4 km) 上流の「プーリー」(おそらく後のポルまたはプル) 村までであった。彼自身はゴリドとマングンの言語, 生活様式, 習慣, 宗教上の相違を十分観察し得なかったが, そこに本質的な差異があることを予想している(マーク 1972: 210)。彼はまた, マングンとともにオロチにも遭遇しているが, やはりマングンに非常に似ているという印象を受けている(マーク 1972: 216)。そして彼はキジ湖に出る前にアムール川河口の村メオ(現在のニコラエフスク・ナ・アムール川の対岸のメオ岬にあった)から来たギリヤークにも会っているが, 彼らについては言語的, 形質的にツングースとは全く違っていると述べている(マーク 1972: 216)。

しかし, マングン, オロチ, ギリヤークについては詳しい記述を残していない。というのは, 彼が旅行したのはキジ湖畔のマリーンスクというロシアの拠点までであり, それより下流へは行っていないからである。彼はその旅行記に見たままを書いているのであろうが, 民族分類については, 彼以前にアムール川を旅行したロシア人の報告やシーボルトがもたらした間宮林蔵らの記録の影響を受けていることは否めない。

3.3 シュレンクによる民族分類

3.3.1 分類基準

マークに続いてアムール川下流域の民族構成について詳しい報告を残し, 後世の研究の基礎を築いたのはシュレンク L. von Schrenck (Л. И. Шренк) である。彼はマークが旅行したのとちょうど同じ頃, すなわち1854年から56年にかけて, 約2年半にわたってこの地域の調査を行った。その結果は彼の二大業績である『1854年～56年のアムールランドにおける旅行と調査』*Reisen und Forschungen in Amur-Lande in den Jahren 1854-1856* と『アムール地方の異民族について』*Об инородцах амурского края* としてまとめられた。前者は彼が組織した調査団全体の報告書であり, 民族学関係のものばかりでなく, 地理学, 地質学, 動植物学などの自然科学系の報告も数多く含まれているが, 後者は前者の民族学関係の部分だけを取り出し, ロシア語で出版されたものである。ドイツ語で書かれた前者の報告書は19世紀のアムール地方の民族, 自然を詳しく著した名著として世界的にもしばしば引用される。

では, シュレンクはこの地方の民族構成をどのように描いているのだろうか。

彼はマークまでの先駆者たちとは異なり, 調査で得られたインフォーマントたちの自他区別意識だけに囚われることなく, より客観的な分類基準を求めた。それが言語系統である。彼はまずこの地方の「異民族」⁶⁾をギリヤーク *Гиляки* (ドイツ語では

Giljaken), アイヌ Айны (Ainen), ツングース Тунгусы (Tungussen) という言語的に全く異なる3つのグループに分類する (Шренк 1883: 11)。これは今でこそ常識になっているが、当時明確にこのことを指摘したのはシュレンクが最初であった。

この大きな分類枠に従えば、この3集団のうち、最も広い範囲を占めているのがツングースで、他ではギリヤークがこの地域の北部を占め、アイヌが南東の端を占めるにすぎない。そして、シュレンクはツングースをさらに次のような集団に分類する (Шренк 1883: 12)。

まず、松花江とその支流域には満洲 Маньчжуры がいる。彼らはツングースの中では文字と文献を持つ唯一の民族で、広大な中国をも支配する。嫩江の河谷平野にはダウル Дауры (ドイツ語では Dauren) がいる⁷⁾。彼らは以前にはもっと広い範囲に広がっていたが、最も早くロシアのコサックたちと遭遇し、その進出を避けて逃れねばならなかった。嫩江のさらに北にはかつての清朝の軍団の子孫であるソロン Солоны (Solonen) がいる。シルカ川とアルグン川が合流してアムール川となる地点から、この川を下って行くと、まず漂泊民であるオロチョン Ороочоны (Orotschonen) に出会い、次にゼーヤ川にかけてマネギール Манегирцы (Manegiren) がおり、そしてブレヤ川にはビラル Бирары (Biraren) が住んでいる。ブレヤ山脈までの山地を過ぎると、それからしばらくは河谷平野にゴリド Гольды (Golden) が住んでいる。彼らはまたアムール川右岸に注ぐ支流の下流地帯にも居住している。そして彼らの下流にはオリチ Ольчи (Oltcha) またはマングン Мангуны と呼ばれる人々が住み、彼らはまた下流でギリヤークと接している。この他にも、アムール川左岸に注ぐ支流沿いに次のようなツングース系の「民族」がいる。すなわち、クル川沿いのキリ Кили (Kilen), ゴリン川沿いのサマギール Самагирцы (Samagiren), アムグニ川沿いのネギダール Негидальцы (Negidalen) である。さらにアムール川の下流とウスリー川から東へ、つまりウスリー川右岸支流の上流地方の山地と海岸地帯には、人口は希薄であるが、オロチ Орочи (Orotschen) の集落がある。そして、樺太中部には半遊牧的生活を送るツングース系民族、オロキ Ороки (Oroken) がいる。さらに、少数ではあるが、毎年トナカイに乗ってオホーツク海沿岸からアムール川下流域へ、またはウダ川、レナ川からブレヤ川、ゼーヤ川方面へ移動するトナカイ・ツングース Тунгусы (Tungussen) のグループもいる。

このうち、松花江河口より上流に位置するダウル、ソロン、オロチョン、マネギール、ビラルは本稿の対象とする地域から外れるので除外することとし、残りのゴリド、オリチ、キリ、サマギール、ネギダール、オロチ、オロキと、ツングースではな

いギリヤークとアイヌについて、その分布や設定基準などをもう少し詳しく調べてみよう（図8）。

もとよりシュレンク自身認めることであるが、これらの各民族の分布範囲とその境界を正確に決めることはできない。彼らの多くが移動生活をし、その猟場、漁場も非常に入り組んだ形で使われているためである。シュレンクがその著書の中で各民族の分布を定める試みに使用した資料は、彼自身が集めたもの、現地のインフォーマントが提供したもの、そして他の旅行者たちからの情報であった（Шренк 1883: 12）。

3.3.2 ギリヤーク

まずギリヤークについては、その言語が他の周辺諸民族のものとは異なる点が大きな特徴とされる（図9、図10）。シュレンクはその名称の由来を漢語の「キレ」Kile または「キレング」Kileng にあるとする。彼の説では、ツングース系の人々の氏族名称の末尾によく現れる「ギル」gir という部分が漢語で「キル」kil となり、そこから「キレ」、「キレング」という名称が生まれたという。そして、ギリヤークとキレ、キレングが同一の対象を指していると考えられるのは、「ギリヤーク」という名称がロシア人に広くアムール川下流域の住民全体を指して使われるように、中国でも同じように「キレ」、「キレング」という名称がアムール川左岸の支流沿いの住民だけにな



図9 ギリヤークの男性（Шренк 1883:фиг.II）

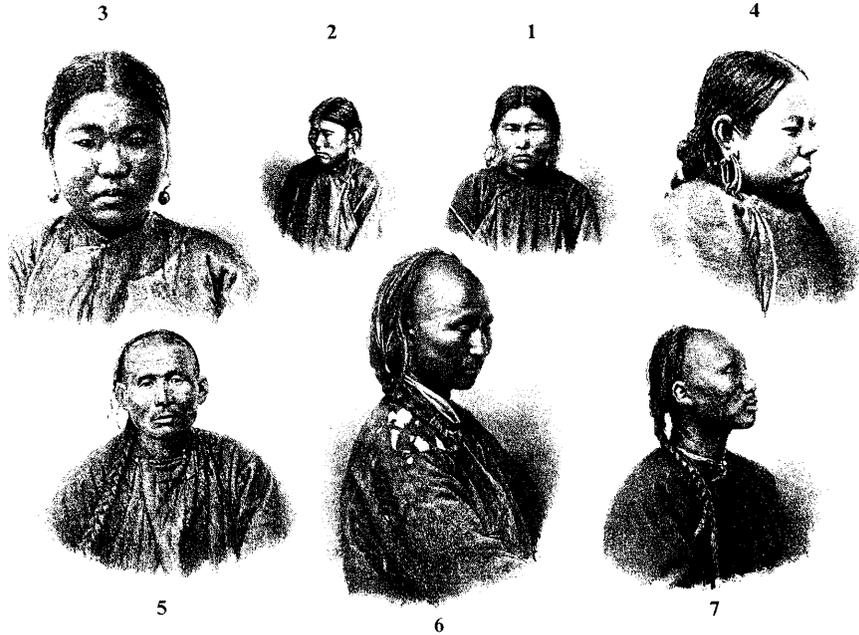


図10 ギリヤーク女性とゴリドの男性
 1, 2 ギリヤーク女性, 3, 4 ギリヤークの少女, 5, 6, 7 ゴリドの男性
 ゴリドの男性が額を剃り, 弁髪を結っていることに注意 (Шренк 1883: фиг. III)

く、ギリヤーク、オリチ、一部ゴリドまでも含んだ形で使われているという事実があるからである。そして、「キレ」、「キレング」がダウールを通じてツングースに伝えられ、そこからロシア人に伝わって「ギリヤーク」となった (Шренк 1883: 105-107) というのである。ただし、後述のようにこの考え方は間違いである。

ギリヤーク自身の自称をシュレンクは「ニバフ」Ниб(а)х (今日ではニヴフ Нивх と記されるのが普通である) と記している。しかし、彼はまた、ギリヤークたちがロシア人と接触するようになって以来「ギリヤーク」という名称も通用するようになっていることを指摘している (Шренк 1883: 13)。

その居住地域はアムール地方の北東のはずれ、すなわちアムール川最下流域と河口両岸の海岸地帯、それに樺太の北半分である (Шренк 1883: 13)。アムール川流域では、それに沿って下ったとすると、ギリヤークの村が始まるのは右岸のヒヤレ Хьяре、左岸のトリャリス Тляльс という村からである。これらは河口から175露里 (約 186.7 km) 遡ったところにある。そこからしばらくは右岸にしか村はないが、川が最後に東に湾曲するところから下流には河口まで両岸に村が連なる。河口周辺の海岸地帯もギリヤークの居住地だが、河口から南へいくと Чоми Чоми という村が最

後の村となり、それから先はギリヤークらが漁場、猟場として使うだけの無人地帯となる。河口から北へ向かうと、プイル村 **Пуир** を経て海岸べりのコリ **Коль** またはクリ **Куль** という村が最後になる。しかし、シュレンクよりも10年ほど前にこの地方を訪れたミッデンドルフの報告によれば、そこよりもさらに西のトゥグル湾（トゥグル川が注ぐ湾）でもギリヤークの集落が見られたという（**Шренк 1883: 13**）⁸⁾。

樺太における居住域は、特にその西海岸においては大陸よりもはるかに南まで延びている。その南端の村ピリャ・ウォ **Пиля-во** は北緯約50度のところにある。一方、東海岸の方では若干北に寄っており、最南端の村チャムル・ウォ **Чамр-во** は北緯約51度である。樺太の中部ではティミ川 **Тымы** に沿ってその河源の方まで居住域が延びている（**Шренк 1883: 14-15**）。

シュレンクはギリヤークの地理的な分布について、次のようなコメントを加えている。

すなわち、ギリヤークの居住地域はオホーツク海、日本海、タタール海峡の海岸地帯と、アムール川、ティミ川といった大河川の流域であり、日常生活における川と海の役割がここから伺えるという。彼らは東と北では他民族と接していないが、西と南で隣り合っている。例えば、大陸では漂泊するトナカイ・ツングースを始め、ネギダール、オリチ、オロチらと、樺太ではオロキ、アイヌらと直接接触している。このことは一面ではギリヤークを他のアムール地方の民族から孤立させ、その独自性を大きくしているが、他方ではまたこの位置関係によって彼らを大陸と樺太の諸民族をつなぐ架け橋にしている。そして、彼らが関係する民族には中国、日本といった高文明を持った民族も含まれる（**Шренк 1883: 15**）。

ギリヤークは言語において他のアムール地方の諸民族とは大きく異なるものの、その居住範囲はそれほど単純には区別できない。ここでは1つの民族の居住地に他の民族が入り込んでいることが珍しくないからである。例えば、オホーツク海沿岸では漂泊ツングースがコリ村村近まで出てきてテントを張ることは珍しくない。トゥグル湾へはアムグニ川からネギダールも猟にやって来る。オレリ湖 **Орель** とチュリャ **Чля** 湖の沿岸にはチュリャというギリヤークの村があるにもかかわらず、ネギダールが常住している。アムール川沿いで最も上流に位置するギリヤークの村はヒヤレであったが、それよりもはるかに下流であるというのにチリヴィ **Чыльви** とティール **Тыр** という村はオリチの村である（チリヴィに6戸、ティールに2戸）。また逆に、オリチの居住地域でギリヤークを見かけることもある。例えば、キジ湖の少し北に位置するアウレ **Ауре** という村では6戸のうち3戸が既に久しくギリヤークであった（**Шренк**

1883: 15-16)。

このような状況は樺太でも同じである。西海岸でもギリヤークの南端の村ピリャ・ウォより北にアイヌが住み、ピリャ・ウォそのものもギリヤークとアイヌが半々ずつ住んでいる（ピリャ・ウォとはギリヤーク語で「大きな村」という意味だが、アイヌも同じ意味の「ポロ・コタン」という名で呼んでいる—筆者）。また、猟のためにさらに南に行くこともしばしばあり、時には交易のために樺太の南端にある白土へ行き、必要ならばそこで冬を越すこともある。東海岸では事情はより複雑で、例えば、チェルベニヤ湾（タライカ湾—筆者）沿岸ではアイヌとオロキとギリヤークが混住している（Шренк 1883: 17）。

3.3.3 アイヌ

ギリヤークがアムール地方の北東の隅を占めるのならば、アイヌはその南東の隅を占めることになる。樺太西海岸におけるアイヌの居住域が北でギリヤークと重なることは既に述べた通りであるが、ピリャ・ウォ（ポロ・コタン）から南へは北緯約49度まで無人地帯が続き、アイヌだけの村で最も北に位置するのがオロケス **Орокес** である。東海岸ではオロキとの混住の村タライカ **Тарайка** を除けば、ナヨロ **Найоро**（名寄）が最も北になる。シュレンクは樺太アイヌは北海道から広がったものであるとはっきりと述べている（Шренк 1883: 18, 134）(図11)。

3.3.4 オロキ

ギリヤークとアイヌという2つの定住的漁撈民にはさまれるように分布しているのが樺太第3の民族オロキ（**Ороки**）である。彼らは前2者と違って、トナカイを使って季節的に移動する半遊牧的民族である。彼らは東海岸には比較的固定的な集落を持つが、西海岸へは放牧に出かけるだけである。その東海岸の集落の中で最も北に位置し、その上最も主要なものはギリヤークからケクル・ウォ **Кекр-во** と呼ばれる集落である。その位置はつまびらかではないが、シュレンクが引用した先駆者たちの報告によれば北緯52度58分にあるという。ということはギリヤークの居住域の中に深く入り込んでいるということになる（Шренк 1883: 19-20）。

南の方ではチェルベニヤ湾一帯でアイヌと混住している。その中で最も南に位置するのは、シスカ川沿いにあるチョグボ **Чогбо** という集落である。オロキの遊牧経路は海岸沿いではなく、内陸のティミ川やポロナイ川（またはティ川）沿いである。そこには無人の平原が広がっており、時折2～3戸のテントが見られる程度である。

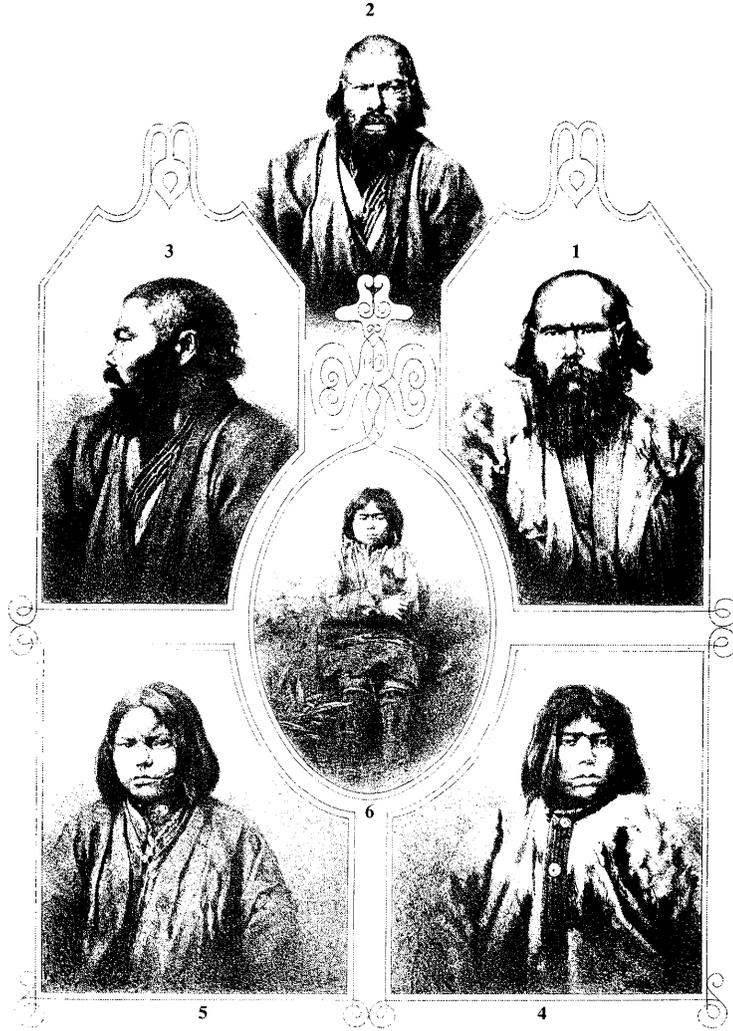


図11 アイヌの人々 (Шренк 1883:фиг.IV)

彼らの季節的遊牧の中で、シュレンクは興味深い移動経路を報告している。それは彼らが毎年冬に行うもので、ケクル・ヴォなどの東海岸の放牧地からティミ川沿いに遡り、その源流付近で峠を越えて西海岸のギリヤークの村アルカイ Аркай (アルコエー筆者) かムィグナイ Мыгнай に出る。それから海岸を若干北上し、海峡を渡って、チョミ村辺りが出る。そこには樺太の川と同じ名のティミと呼ばれる川が流れ込んでいるが、それを遡って峠を越え、アムール川の支流を下って、オリチの村であるブルに出る。そしてそこにしばらく滞在して同じ道を引き返していく (Шренк 1883:

21) (冬には海峡が凍結するので、トナカイの移動には支障はないと考えられる一筆者)。シュレンクによれば、結果的にはではあるが、この旅はオロキと近親関係にあるオリチとの出会いを実現させる。彼は、後で詳しく述べるように、オロキとオリチとを起源を同じくする民族と考えており、この移動経路は樺太への最初の移住経路であろうと述べている (Шренк 1883: 21)。

ところで、その名称についてであるが、南の隣人であるアイヌには「オロフコ」Орохко、西海岸のギリヤークには「オロングタ」Оронгта、ティミ川流域のギリヤークには「オロコ」Ороко、大陸のギリヤークには「トゾング」Тозонг、日本人には「オロツコ」Ороцко (「ヲロツコ」, 「オロツコ」を指す一筆者) または「オリカタ」Ориката (「オリカタ」または「ヲリカタ」を指す。オロングタ Оронгта に由来する一筆者) などと呼ばれる。シュレンクはその名称の起源を、オロチョンと同様に、トナカイを意味する「オロン」орон という言葉に求める⁹⁾。つまりトナカイを飼う者という意味である。彼らの名称に非常によく似たものには、オロチョンの他にオロチ Орочи とオリチ Ольчи (ツングース語では r と l はしばしば混同されることがあり、実際ギリヤークはウリチを「オロングル」Оронгр または「オロングシュ」Оронгш などと呼んでいる) があるが、彼にいわせるとこれらもその由来はオロキと同じであるという (Шренк 1883: 136-138)。

シュレンクは、これらはすべてかつて山中でトナカイを飼いながら生活をしていた人々で、トナカイを失った者が海岸で漁撈民になり、そのままトナカイ飼育を続けた者が大陸のオロチョンと樺太のオロキだったと考える。そして、この「オロン」орон を語幹に持つ名称は満洲またはその祖先に当たる人々によって創られ、それがこれらの人々によって自称として採用され、さらにギリヤークにまで借用されたという。特にオロキとオリチは共通の自称「オリチャ」Ольча¹⁰⁾ を持ち、言葉も外観もよく似ていることから、両者は非常に近い親縁関係にある民族だったが、それをギリヤークにも看取され、その結果それぞれ「オロングタ」Оронгта または「オロコ」Ороко、そして「オロングル」Оронгр または「オロングシュ」Оронгш という類似の名称が与えられたのだというのである。アイヌの呼称である「オロフコ」Орохко はギリヤークの呼称が元になっており、それを日本人が借用した (Шренк 1883: 138-139)。

彼は樺太の民族を総括して、そこにはギリヤーク、アイヌ、オロキという言葉、性格を全く異にする民族がおり、それぞれ樺太と周辺地域の諸民族との交流を仲介していると述べる。例えば、ギリヤークはオホーツク海沿岸やアムール川最下流域の人々

との交流を、オロキはアムール地方や他のツングース系の住民との交流を、そしてアイヌは北海道やクリル諸島（千島列島—筆者）の人々、そして日本との交流を担っているのである（Шренк 1883: 21）。

3.3.5 オロチ

再び大陸側に戻ると、ギリヤークの居住地の南にはオロチという民族がいる。彼らは日本海に面した海岸地帯、その海岸に沿って走るシホテ・アリニ山脈、そしてアムール川下流やウスリー川に流れ込む支流の上流方面に居住する。彼らは周辺のゴリド、ギリヤーク、満洲らから「キャカラ」Киякала、「ケカル」Кэкарなどの名称で呼ばれ、それは漢族にも使われていた。シュレンクは、ゴリドの方がオロチと接する機会が多かったことから、ギリヤークはゴリドから「ケカル」という名称を借用したのではないかと考える。そして、以下に述べるように、オロチの人口分布は南に多く、北に行くほど密度が低くなることから、彼らはもともと朝鮮との境から北上してきたのではないかと述べる（Шренк 1883: 140-141）¹¹⁾。

しかし、南からやって来たとする、「オロチ」という名称の由来の問題が複雑になる。というのは、前述のごとく、シュレンクはオロチという名称をオロキと同様にトナカイ飼育に由来すると考えていたが、それはこのオロチ南方起源説と矛盾してしまうからである。

ところで、オロチという名称をタタール海峡沿岸の住民に付けた最初の人物はラペルーズ F. G. Lapérouse であった。彼は、1787年に日本海から樺太、クリル諸島（千島列島）を訪れた航海において、タタール海峡沿いの有名な湾であるデ・カストリ湾 De Castries に停泊中その住民を調査したが、その時彼らが自分たちを「オロッチイ」Orotchy と称したというのである（ラペルーズ 1988: 108）。

しかし、このことについてシュレンクは否定的な見解を示している。彼によれば、オリチの項目でも触れるように、このデ・カストリ湾周辺はオリチとオロチの分布が重なるところで、ラペルーズが見た2種類の墓の違いは彼のいうように貧富の差ではなく、実はオリチとオロチという民族的な差によるものであった。そしてラペルーズは、ツングース語にしばしば起きる l と r の交替によってオリチャ Ольча をオルチャ Орча またはオロチャ Ороча と聞き取り、それを彼らの自称としてしまったというのである（Шренк 1883: 142）。つまり、シュレンクの解釈では、ラペルーズは実はオリチにその民族名称を尋ねていたというのである。しかし、シュレンクはまたオロチという名称をデ・カストリ湾からスイフン川（綏芬河）に至る日本海沿岸の住民

に適用したのはここに入植してきたロシア人であってラベルズではないと彼を弁護している。そして、実はこの地域の住民には「オロチ」Орочиに類する自称はなく、シュレンク自身この「オロチ」という名称は不適切であることを認めつつも他により適切な名称もないために使用しているだけであると弁明している（Шренк 1883: 142-143）¹²⁾。

オロチの分布域は広いが人口密度は低い。日本海沿いの最も北の集落はナングマル Нангмар といい、今のデ・カストリ湾に面している。ここからギリヤークの最南端の村チョミまではしばらく無人地帯が続く。この無人地帯の中程にタバ湾からキジ湖へと向かう古い交易路が通っており、それはゴリド、オリチ、ギリヤークらに使われるとともに、彼らの居住域の境界をもなしていた（Шренк 1883: 22）。

オロチの集落はデ・カストリ湾から南へ2～3日の行程で点々と続く。ここを最初に調査したボシュニャークによれば、1853年に彼が調査した時にはデ・カストリ湾から、ドゥグ Дугу、ホイ Хои、スルクン Суркун（ホイスモ Хойсмо）、アウカン Аукап、ホヨリ Хойоль、ブィキ Быки、ダタ Дата、ヂュアンコ Джуанко、ウイ Уйと続く（Бошняк 1859: 201-205, Шренк 1883: 23）。また、その南にはハジ Хаджи¹³⁾、キョピ Кёпи、イジ Идиという集落もあった。これらは、ホイのように恒常的に住まわれているものもあったが、多くは季節的な集落で、人々は夏の間この日本海沿岸にいて、冬になるとキジ湖やそれに注ぐ川、またはアムール川に注ぐ支流の流域に移動した。ただ、キョピ村は1864年に天然痘が流行した時に住民が死に絶えたといわれている（Шренк 1883: 23）。

彼らの居住域の南限はスイフン川（綏芬河）であったという。ただしここまで来ると「マンズ」Манзあるいは「マンツ」Маньцと呼ばれる中国人との混住状態になり、その影響を受けたものは特に「ターズ」Tatszen/Тацзы または Тазы と呼ばれていた（Шренк 1883: 23）¹⁴⁾。

以上のようにオロチまたはターズと呼ばれるグループの分布は南北に非常に長く延びていた（緯度にすると9度にもなる）。その東の限界は海であるので明白であるが、西の境がはっきりとはしない。というのは、西の隣人であり典型的な漁撈民であるオリチやゴリドと違って、彼らは漂泊的な狩猟民であり、移動性が高かったからである。しかも、互いに接しているアムール川やウスリー川の支流では、漁場として有効な場所ならばオリチやゴリドが占めるが、水揚げが少なく漁場としては使えなくても狩猟動物が多ければオロチが占めるという具合に、土地の条件によって境界線が決められていた。一般的に、アムール川とウスリー川の支流の上流はオロチが占め、河口付

近と大きな支流の下流をゴリドが占めていた (Шренк 1883: 24)。

その境界領域をもう少し詳しく見てみると、キジ湖に注ぐペ川 Пэ とヤイ川 Яй にいたのはオロチだった。彼らは夏になると海へ出るが、アムール川は彼らの活動範囲にはならない。というのは、ペ川の河口にはオリチの集落があったからである。それより若干南でアムール川に注ぐ支流ミエタ川 Мизга 沿いは無人地帯で、オリチとオロチの交易路が通っているだけであった。アムール川下流域で右岸に注ぐ大きな支流の1つであるホンガル Хонгар (またはフンガリー Хунгари—筆者) 川ではオロチは広く分布していた。ここでゴリドが居住するのは河口付近と河口から水路3日、冬の陸路1日程度上流にある村ハジャリ Хаджаль、ヘロレ Хероле、ゴアルモ Гоармо までであり、それから上はオロチの居住範囲であったという。この先にはウリトゥル Ультур (3~4戸、冬の集落であり、夏にはもっと上流に住む) を始め、オドメ Одоме (1戸)、ウイ・オドメ Уй-одоме (2戸)、ピル Пир (1戸)、ジングダナ Джингдана (ウリトゥル村の夏の集落)、ウリジイ Ульди (1戸) などの村があった。ホンガル川の南でアムール川に注ぐもう1つの大きな支流であるナイヘ川 Найхе (またはダ川 Да)¹⁵⁾ でもやはり下流にゴリド (ヤウカ Яку, ドゥリャリャ Дуляля), 上流にオロチが住んでいた (セラフセ Серахсе, ベラ Бера) (Шренк 1883: 24-25)。

ウスリー川右岸に流れ込む支流沿いもオロチの居住地域であった。特にボル川 Пор (フォル Фор またはホル Хор ともいう。漢語では「和羅河」と表される一筆者) より南のコルソナ川 Корсона, ビキ川 Бики (またはビキン川 Бикин, 漢語で「畢新河」などと表される一筆者), イマ川 Има (またはイマン川 Иман, 漢語では「尼滿河」または「伊滿河」などと記される。現在はウスルガ川 Усурга と呼ばれる一筆者), ワク川 Ваку などの上流部分がオロチに占められていた。しかしここではかなり多数の漢族もオロチとともに漂泊生活をしていた。ウスリー川でのオロチとゴリドの接点は支流の1つであるダウビヘ川 Даубихе の河口であった。ゴリドの居住地域はそこより下流までで、上流はオロチの居住地域となっていた。

シュレンクはオロチの居住地域とその生活様式を総括して、彼らは山がちなところに生活し、狩猟を営みながら日本海からアムール川やウスリー川の近くまでを生活圏としていたと述べている (Шренк 1883: 26)。

3.3.6 オリチ (マングン)

アムール川上でギリヤークと接しているのはオリチ Ольчи (ドイツ語ではオル

チャ Oltscha) またはロシア人がマングン Мангуны と呼んでいる人々である (図 5, 図 6, 図 7 参照)。彼らはツングース語を話す点で北隣のギリヤークと異なり、方言の違いと外観, 生活様式などの違いによって, 南の隣人であるゴリドとも異なっている。しかしそれにもかかわらず, アムール川を往復した旅行者たちは誰も彼らの居住領域を明確に定めていない。というのは, これまでの調査者や旅行者の多くが彼らの土地をギリヤークとゴリドの居住地として 2 つに切ってしまう, 彼ら全体をギリヤークに含めてオリチという民族の存在を全く示さないからである。

シュレンクはまず, 彼の時代までの歴史文献でもオリチがしばしばゴリドまたはギリヤークに含められ, 独自のカテゴリーをなすことがなかったことを指摘している。例えば, 漢族や満洲は彼らをゴリドと区別せずに「ヘジェ」Хэдже または「ヘジン」Хэцзинь と呼んでいた。また, 18世紀初頭にアムール地方を調査したイエズス会士は, ドンドン川 (アニュイ川) の河口より上流か下流かで住民が異なり, 後者を「ケチェン」Кеченг/Кеченг と呼んでいる。もっともその理由は, シュレンクにいわせれば, ゴリド自身ドンドン川を境にしてその下流と上流では言葉が違い, 下流方面ではかえってオリチに近かったからだということになる。また, 17世紀までは満洲式の弁髪がドンドン川より下流には普及していなかったことも関係するらしい¹⁶⁾。オリチ自身は満洲で「ヘジェ」などと呼ばれていることを知っている。この名称の元は「フジイ」хыды または「フチ」хычжи という「下へ」, 「下流へ」という意味の言葉にあり, 「フジイ・ネイ」хычжи ней といえは「下流方面に住む人」を意味する。これに類する言葉はゴリド語にも満洲語にも共通している。満洲らのヘジェという名称は, 当初は彼らになじみの薄かったアムール川下流域の住民をまとめて指す言葉として使われ始めたが, 次第にギリヤークやオロチの存在に気付くとともに, ゴリドとオリチを指す言葉に変わったというのである (Шренк 1883: 145-146)。

ロシア人もまた満洲と同じように当初はゴリドとオリチの区別に気付かなかった。17世紀にアムール川へ進入したポヤルコフとハバーロフはそれぞれナトキまたはアチャンという住民がオリチとゴリドの居住地に当たる地域にいたことを報告している。しかし, 彼らの報告書を直接目にするのができなかったシュレンクはナトキをゴリドに, アチャンをオリチにそれぞれ当てるといふ, 今から見れば明らかな誤りを犯してしまった (Шренк 1883: 146)。

シュレンクによれば, 初めてゴリドとオリチの区別をしたのはイアキンフ・ビチューリン Иакинф Бичурин であるという。彼は, 1815年から26年の間にたびたびアムール川流域へ入っていたグレイ・ヴァシーリエフ Гурый Васильев という人物の

情報に基づいて、アムール川下流域の住民を「ヤンティ」**Янты**、「オルリキ」**Орлики**、「ギリヤーク」**Гиляки**の3つに区分した（**Бичурин 1822: 222-224; Шренк 1883: 147**）。シュレンクは、オルリキの語源をギリヤークがオリチを指して使う「オロング」**Оронгр** または「オロングシュ」**Оронгш** であるとして、この呼称がオリチを指すはずであったが、19世紀初頭のロシア人はこれをドンドン川河口からゴリン川河口までの住民に適用してしまったというのである（**Шренк 1883: 147-148**）¹⁷⁾。そして、1850年代に入ってロシア人は初めて、部分的にはあるが、オリチをゴリドやギリヤークから区別するようになる。その時の名称が「マングン」**Мангуны** というものであった。ただしこの呼称はオリチだけを特定するものではなく、単に支流の住民から自らを区別する意味で「アムール川の人」といっているにすぎない¹⁸⁾。

シュレンクは「オリチ」**Oltscha/Ольчи** という呼称を使うことについて次のように説明する（彼によれば「オリチ」というのは当時彼らが自分たちを指して使っていた）。

なぜ私が本書においてこの民族に「オリチ」という名称を使うのか。それは、現在この名称をこの民族自身が名乗っており、この名称が彼らのものであることが疑いないからである。私はそれを1855年に初めてアムール川沿いのオリチの全居住地に沿って旅をしたときに確信した。この名称の意味するところはオリチの有史以前の動向をかいま見せてくれる。すなわち、オリチはかつて西に広がる山岳地帯でトナカイを持って遊牧していたのであり、トナカイを失ってアムール川沿岸に移住せざるを得ず、定住的な漁撈民になったのである。同様のことは規模の大小はあれ、シベリアにいたツングース系の種族の間で繰り返されてきた。オリチの場合、この生活様式の転換がきわめて古い時代に起きていたにもかかわらず、その記憶が現在でも伝説の中に残されていたということを付け加えておこう。（**Шренк 1883: 149**）

しかし、次の章で述べるように、オリチがかつてトナカイ遊牧民であったという仮説は後に否定される。

オリチの居住範囲で最も北の集落は、上記で述べたギリヤークの居住域内にある集落を除けば、右岸ではテンチャ **Тенча**（現在のウリチ地区の中心村ボゴロツコエ **Богородское**—筆者）、左岸ではウフトル **Ухтр**（現在ではウфта **Ухта** と呼ばれている—筆者）で、これらはギリヤークの南の端であるヒヤレ、トゥリヤリスからさほど遠くない。また南のゴリドとの境は右岸の大きな村であるアジ **Ади** と左岸の小さな集落クリグ **Кульгу** にある。オリチの居住範囲はきわめて小さく、交易などの例外的な場合を除けば、アムール川の支流には進出しない。また彼らの居住域にはギリ

ヤークが少々とゴリドが少なからずいる。シュレンクよれば、これはゴリドが満洲に押されているため、オリチがゴリドの地で見かけられることはないという(Шренк 1883: 28)¹⁹⁾。

3.3.7 ゴリド

オリチに比べてゴリドの居住範囲はきわめて広く、オリチの居住範囲の南端からウスリー川、松花江に至るまで、そして、アムール川の右岸の支流沿いと一部左岸にまたがっている(図3, 図4, 図10参照)。彼らの居住範囲の北端はアムール川右岸ではチウチャ **Чичуча**、左岸ではケウルミ **Кеурми** で、オリチの居住地に接している。アムール川でのゴリドの居住域の南端は松花江の河口である。そこより上流には時折松花江のゴリドが漁に来るくらいで、原則的には松花江河口より下流に住む者がそこより上流へ行くことは満洲人によって禁じられている。アムール川右岸の支流沿いにおけるゴリドとオロチの居住域の境界は上に述べた通りであるが、左岸の支流沿いではゴリン川とクル川の河口付近とボラン湖 **Боланг** (現在のボロン湖 **Болон**—筆者)に流れ込む川が彼らの居住地となっている。また、ウスリー川とその支流域も彼らにとって主要な居住地の1つで、その南端はハンカ湖(興凱湖)からウスリー川に流れるスガチャ川 **Сунгача** とそこに右岸から合流するダウビヘ川 **Даубихэ** にあるという。松花江沿いのゴリドはウスリー川よりもさらに数は少ないが、その右岸に13~14の集落があった(左岸側は清朝によって居住が禁じられていた)。その最も上流にあり、松花江ゴリドの居住地の南端に当たるのがインダモ **Индамо** という集落で、それより先は満洲と漢族の村が続く(Шренк 1883: 28-30)。

シュレンクはゴリン川河口から松花江、ウスリー川上流までの広い範囲に広がって分布する人々を「ゴリド」**Гольды** (ドイツ語では **Golden**) の名称で一括して呼ぶことを提唱して、前述のマークのように、ウスリー川や松花江河口とウスリー川河口の間にいる人々を「ホゼング」または「ホジェン」と呼んで「ゴリド」と呼ぶアムール川下流域に住む人々と区別することに反対した。シュレンクの意見ではゴリドの言葉には様々な方言があり、満洲に近いところに住む人々の言語は満洲語に近くなる。しかし、それでもマークのように一部のゴリドに別の名称を付けて他から区分する根拠にはならないというのである。しかも、ゴリドの言語はマークのいうようにウスリー川河口で大きく変わるのではなく、ゲオング山地 **Геонгский хлебет** (ドンドン川すなわち現在のアニュイ川の北側を東西に走る山脈) で大きく変わる。したがって、ウスリー川河口で区分するのは言語的にも根拠がないというのである。そしてシュレン

クは、たとえ一部のゴリドにでも別の名称を付けて区別すれば様々な誤解を生むことになるため、ゴリドという名称で一括して呼ぶべきであると主張した（Шренк 1883: 151-152）。彼はゴリドの中の言語的、文化的多様性を認めながらも、彼自身の観察に全面的な信頼をおいて客観的に彼らを1つの民族（彼は「ナロード」народ という言葉を使う）であると判断したのである。

なお、「ゴリド」という呼称の由来について、19世紀当時ロシア語であるとする説もあったが、シュレンクはそれに反対する。というのは、間宮林蔵のアムール探検の記録である『東韃地方紀行』に登場する「コルデッケ」（ロシア語表記では Кордэкке）というのが「ゴリド」に他ならないからである。g と k, l と r の交替は日本語の音韻上の性質によるもので、それを考慮すると「コリデッケ」Кольдеккеあるいは「ゴリデッケ」Гольдекке とすることができる。ということは、ロシア語の「ゴリド」は日本語の「コルデッケ」と語源的に同じ言葉となり、ロシア語起源説は成り立たないというのである（Шренк 1883: 153）。

この「ゴリド」Гольды という呼称は自称であるが、シュレンクが観察したところでは対ロシア人用の自称であって彼らの中では使用しないらしい。これは、「ギリヤーク」Гиляки がやはりロシア人を相手にしか使われず、ギリヤーク自身の間では Ниб(а)х というのと同じである。この「ゴリド」という呼称は彼の意見ではギリヤーク語であるという。というのは、間宮林蔵も「コルデッケ」という呼称をゴリド自身から聞いたわけではなく、スメレンクルすなわちギリヤークから教わったのであり、1850年代のロシア人も初めてアムール川を河口から遡った際にギリヤークから「ゴリド」という名の人々がいることを知ったからである（この当時ロシア人はアムール川の河口方面から勢力を伸ばしてきた）。ただし、ギリヤークに彼らの居住地より上流にはどのような人間が住んでいるかと尋ねると、「オロングシュ Оронгшу, ヤント Яант, チョルドック Чольдок（またはチョルドッホ Чольдох）, 満洲 Маньчжу がある」と答えるという（Шренк 1883: 153）。この場合、ゴリドに当たる人々が「ヤント」と「チョルドック」に分かれるが、シュレンクはこれを下流部ゴリドと上流部ゴリドに当て、日本語のコルデッケやロシア語のゴリドもチョルドックから発生したとする（Шренк 1883: 153-154）（ちなみにアイヌと日本人の間で使用される「ジャンタ」Съянта, 「サンタン」Сантан という言葉はヤントに由来する）。

3.3.8 ネギダール

アムール川の西側には、左岸に注ぐ3つの大きな支流、すなわちアムグニ川

Амугуни, ゴリン川 Горин, クル川 Кур (この川はアムール川に注ぐ直前でさらに西側を流れるウルミ川 Урми と合流し, ツングースカ川 Тунгуска となる一筆者) が流れていて, その流域にそれぞれツングース系の住民が住んでいる。彼らに関してはこれまでの住民のような歴史的な情報はないが, アムール川沿いの住民に比べてスタノヴォイ山脈のトナカイ・ツングースとの関係が深いことから, 彼らはオリチより遅れてアムール川の支流に出てきたと考えられるとシュレンクは述べる (Шренк 1883: 30)。

まず最も北のアムグニ川沿いにいるのがロシア人からネギダール **Негидальцы** と呼ばれている住民である。彼らの居住域はほぼアムグニ川沿いに限られるが, その他にはオレリ湖とチュリャ湖でギリヤークと接している者もいる。アムグニ川沿いではその居住地が上流方面と下流方面に分かれており, 上流ではアムグニ川左岸に流れ込む支流であるネミレン川 **Немилен** と右岸のチュクチャギール湖周辺が居住域になっている。アムグニ川ではその地域から下流へ6日ほどの行程の間無人地帯が続き, そこから河口まで再びネギダールの集落が続く。したがって, 彼らはネミレン川の上流方面で, トナカイ・ツングースやヤクートの商人と接触し, チュクシャギール湖のさらに奥でゴリン川のサマギールに接し, アムグニ川の河口でギリヤークとオリチと隣り合うことになる (Шренк 1883: 30-32)。

彼らは既に17世紀から「アムグニ・ツングース」の名でロシア人に知られていた。しかし, 「ネギダール」という名称の元になるものが初めてロシア側の資料に現れるのは1830年代である。当時トゥグル川河口でキリスト教に改宗した住民の中にギリヤークと混じって「ネギダンツィ」**Негиданцы** という住民がいたという。ロシア人が彼らを指して使う「ネギダンツィ」**Негиданцы**, 「ネギダーリツィ」**Негидальцы**, 「ニシュダンツィ」**Нишданцы** などの名称の元の形は, 彼らの自称の1つである「ネグダ」**Негда** であるという。

その他彼らは周辺の住民から, 例えばスタノヴォイ山脈のツングース (エヴェンキ) からは「イルカン」**Ылкан**, ギリヤークからは「ルディ」**Рды** または「ルディング」**Рдынг** と呼ばれている²⁰⁾。他方, ネギダールは接触する周辺の住民に対し, ツングースをドゥムグィトカ **Думгытка**, ギリヤークをギレカ **Гилека**, ヤクートをヨコ **Йоко** と呼んでいる (Шренк 1883: 158)。

3.3.9 サマギール

アムグニ川より1つ南のアムール川左岸の支流であるゴリン川流域にいるのがサマ

ギール **Самагирцы** である。彼らはまた、ごく少数であるが、アムール川沿いの村ブル（本来はオリチの村である）やウディリ湖畔にもいる。その居住範囲の北端で隣接するネギダールとの境界線はゴリン川とアムグニ川の分水嶺が形成している。また、同じ様な状況は彼らの居住域の南と西にもあり、南ではクル川との分水嶺が、西ではブレヤ山脈が彼らの居住域の限界をなしている。ブル村やウディリ湖在住の者を除くと、彼らの居住地の東端はガーガ **Нгаа** というゴリン川上の村になる。これはゴリン川河口のゴリドの村ビチ **Бичи** から約120~130露里（約 130~140 km）上流にあり、その間には無人ではあるが豊かな猟場が続く。ネギダールがアムグニ川河口付近でギリヤークと直接接しているのに対し、類似の状況にあるサマギールとゴリドがこれほど離れているのは、おそらくゴリン川への通路を確保するために満洲がゴリドたちをおさえつけているからであろうとシュレンクは推定している（Шренк 1883: 34）。

彼らの居住域の中で最も人口が集中しているのは、ゴリン川右岸に注ぐ支流であるフイ川 **Хуй** 沿岸である。シュレンクがそこを訪れた時には1~6軒余りの家からなる集落が9つあった。その内訳は、ククレキ **Кукулеки**、フィンダ **Хыинда**、ヤメクタンカ **Ямектанка**、ツォンギンカ **Цонгинка**（以上2戸）、コンドンカ **Кондонка**（6戸）、セロヒャンカ **Серохянка**、ツォルグンカ **Цоргунка**（以上5戸）、フラヂャカ **Хурадяка**（2戸）、ヘロケ **Хероке**（1戸）、カダカド **Кадакадо**（2戸）（Шренк 1883: 32-34）であった²¹⁾。

彼らの来歴についてシュレンクは、類似の名称を持ったツングース氏族がバルグジン地方やアンガラ川北部にいることから（彼らは「シャマギール」**Шамагир** の名で知られる）、その一部がスタノヴォイ山脈またはブレヤ山地を越えてゴリン川にたどりつき、生活環境の変化とゴリド、オリチらとの交流、そして漢族、満洲との接触を通じて次第に源郷に残った人々とは異なる民族になったと考える。そして、彼らが奥地のツングースと深い関係があったことの証拠として、サマギール自身が他のグループの出身者に対して自らを「キレ」**Киле** という呼ぶことや、ギリヤークも彼らを「キリ」**Киль** と呼んでいることなどを挙げている（ただし、ギリヤークはネギダールとサマギールの区別を付けずに「キリ」と呼んでいる）。彼によれば、間宮林蔵が「キレン」と呼んだ住民もサマギールを指しているという（Шренк 1883: 159-160）。

3.3.10 キリ

アムール川左岸に流れ込む第3の支流であるクル川上にいるのがキリ **Кили** である。彼らについてはきわめて情報が少なく、シュレンク自身もクル川河口付近の集落

に住むゴリドから話を聞いたにすぎない。彼の時代までクル川がアムール川のどの辺に流れ込むかすらはっきりしていなかった。しかもキリという名称は漢族によって歪められたツングース系民族の総称である。

しかし、シュレンクがゴリドから集めた情報によれば、キリはゴリドとは若干言葉が違うという。彼らの居住地はクル川水系全域であった。クル川の河口にはセワン・ガウネ *Сэван-гауне* という集落があり、イミンダ *Иминда* とコツィヤ *Коция* というゴリドの集落には含まれていた。そこから上流に向かって、ヒヤ・マンガ *Хыя-манга*、イヴ *Иву*、アジ *Ади*、クジナホ *Кузинахо*、そしてウルミ川との合流地点より上流にセファンドゥ *Сэфанду* という集落があった。ゴリドの話によれば、彼らは卓越した狩人で、交易用の毛皮も豊富であったという（Шренк 1883: 34-35）。

4 20世紀前半における学術的民族分類の深化

4.1 19世紀までの民族分類の問題点

以上のように、19世紀初期からの冒険的なコサックやツングースらによる情報、1850年代から本格的に始まった学術的調査の成果、そして17世紀以来の文献資料などを網羅して、マーク、シュレンクらはアムール川下流域と樺太の「民族構成」を明らかにした。特にシュレンクの業績は、この地域の民族構成を初めて体系化したという功績が大きく、理論的にも、資料的にもその後の研究の基礎となった。その研究成果を見る限り、彼らはこの地域の住民を民族（シュレンクは「ナロード」*народы* という術語を使っている）に分類するのに客観的な指標とともに住民自らの帰属意識をかなり重要視していることがわかる。

シュレンクはまず言語系統によって大きく分類しているが、言語はコミュニケーションの範囲を限定する最も大きな要因であり、特定の民族的な集団への帰属を意識する最大の要因でもあると考えたからであろう。そして、住民自身が自分たちの集団をどのように呼ぶのか、その周囲の人々は彼らをどのような名称で呼ぶのかという点に常に細心の注意を払っている（彼は数多くの相互呼称を挙げている）。また、シュレンクは可能な限りこの地域の歴史にも関心を寄せている（彼の歴史資料の解釈、その記述には少なからず問題があるが）。したがって、19世紀のロシアの民族学者はアムール川流域と樺太の住民の民族構成を語るのに単にこの地域の文化要素の違いだけを基準に使っていたわけではなく、住民の主観的な区分も利用していたといえよう。

ただし、この時代にはまだ民族識別の主観的要因と客観的要因の区別を意識的に行っていないため、マークとシュレンクによる分類においても両者が渾然一体となっていることは否めない。

しかし、彼らの築いたものはあまりにも網羅的であり、また彼ら自身によるフィールドワークも不十分であった。シュレンクもマークも実際この地方を調査したのは2年足らずであった。そのために彼らの民族分類は後の研究者たちによる詳しいフィールドワークに基づくデータによって厳しい批判にさらされることになる。ここで、上で紹介したシュレンクの体系について肯定的に受容された点と批判を受けた点とを明確にしておこう。

まず、彼の設定した民族構成の大枠である、この地域の住民を言語系統の違いによってギリヤーク、アイヌ、ツングースの3つの集団に分類することについては現在に至るまで異論は出ていない。それは、コミュニケーションの媒体であり、分類や範疇化の基準となる言語がこの3者の間では際立って異なるからである。そして、ギリヤークとアイヌが1つの民族をなし、ツングース系の住民が複数の「民族」に分類できるという点にも反対はまだない。ただし、現在のように、住民の主観的な帰属意識や各種集団間の遠近関係などを重視すると、ギリヤーク（ニヴヒ）もアイヌも1民族とするのは問題である。

例えば、ギリヤーク語にはアムール方言（アムール川下流域、海岸部から樺太西海岸）と樺太東海岸方言（ティミ川流域と樺太東海岸）の2つの方言があり、互に通じ難かったといわれる。しかも、その話者たちはそれぞれ異なる生業体系を持ち、また異なる歴史を歩んできた。彼らと接していたアイヌたちもその相違に気付いていて、前者の話者を「スメレンクル」、後者の話者を「ニクブン」と呼び、それが江戸時代の日本の調査官たちに採録された。しかし、シュレンクたちが調査した時代から今日に至るまで、ギリヤーク（またはニヴヒ）を行政的、政治的に1つの「民族」とするだけでなく、研究者の間でも彼らが1つの民族であることに疑念をはさもうとする動きは見られなかった。それはアイヌについても同様である。

おそらくギリヤークにせよアイヌにせよ、それが1民族と判断された根拠には、その言語があまりにも特異で、周辺のツングース系の言語とは際立って違っていたこと、他の文化要素にもツングース系の言語を話す人々にはない特徴が多く見られたこと、多くが定住生活をしていて居住範囲も比較的まとまっていたことなどがあつたと考えられる。また、ロシア人の探検家や民族学者がツングース系の住民に先に接触していたことも、ギリヤークやアイヌの特異性を際立たせるのに一役買っていたと思わ

れる。そして、身近だったツングース系の住民については細かな差違を認めて詳しく分類した。

それと対照的に、北海道のアイヌから接触を始めた日本人は逆に樺太の住民の方が身近だった関係で、その住民を細かく分類した。例えば、ニヴヒ語（ギリヤーク語）の話者たちをスメレンクル、ニクブン、ルモウと分類したり、同じアイヌ語を話すのにもかかわらず、樺太アイヌの中でもとりわけヲロッコやニクブン、スメレンクルなどと接触していた人々を「タライカ」や「キムンアイノ」などと呼んで区別している（彼らが北海道のアイヌと同類であることはすぐに気付かれたが）。そして、縁遠かった大陸の住民に関しては長らく「サンタン」という言葉でまとめていた。サンタンを大陸の特定の地域に住む人々を指す言葉として使用するのは間宮林蔵が初めてであり、彼のアムール地方調査によって大陸側にも様々な呼称で呼ばれる人々がいることが知られるようになったのである。

ギリヤークやアイヌの中の区分が問題にならなかったのに対して、研究者の間で熱い議論が戦わされたのは、ツングース系の中で民族をいかに設定するか、そして設定された民族をどのような呼称で呼ぶべきかという点であった。また、それらと連動して、行政側でもいかに「民族」を設定し、それをいかなる呼称で呼ぶべきかが問題とされた。ロシア極東地方の場合では、研究者の動向と行政側の動向が大体連動する。それは、行政側が民族学者の調査研究結果を俟たなくては何も結論が出せないほど状況を把握しておらず、データもなかったからである。

研究者たちが問題とした点を整理すると次のようになろう。

- 1) ギリヤークとキレという呼称の由来について
- 2) オロキ、オリチ、オロチの名称の由来について
- 3) オロチとウデへの分離の可否について
- 4) サマギールとキリを独立した民族または「民族」とするか否かについて
- 5) マークの提唱したゴリド内部の3つのサブ・グループについて

以下これらの点について論じながら、今日の当該地域の民族と「民族」がシュレンク以降いかに設定されてきたかを解明していこう。

4.2 ギリヤークとキレという呼称の由来について

上述のように、シュレンクは両者が語源を同じくする呼称であると説明しているが、この説は現在は受け入れられていない。シュレンクは、アムール川上流方面やゼーヤ

川方面のツングース（エヴェンキ）たちがギリヤークとその周辺を漂泊するツングース系の住民を「キレ」、「キレング」と呼んで区別していなかったということと、「キレ」または「キレン」と呼ぶ住民と言葉が通じなかったことをその根拠にしている。しかし、たとえそうであっても「キレ」、「キレング」はギリヤークの語源にはなり得ない。ロシア人は既に17世紀に初めてアムール地方に進出した際に「ギレミ」、「ギリヤハ」などというギリヤークにもっと近い呼称に出会っているはずだからである。

また彼は中国人が「キレ」、「キレング」という名称でギリヤークやオリチ、ゴリドまで含めて呼んでいたと述べているが（Шренк 1883: 107）、それも事実と反する。

ツングース諸民族が使っていた「ギリヤーク」という名称の語源ともいべき「ギレミ」という呼称は、既に金代（12世紀）には漢文史料に登場し、元代、明代と続けて現れるが、それは漢字で「吉烈迷」または「乞烈迷」と表される。それに対してキレは清代の17世紀中期に史料に姿を現し、「欺勒爾」、「奇勒爾」、「奇楞」と表記されている。つまり、使用する漢字が明らかに異なっている。現在語頭に使われている「吉」または「乞」は拼音で ji と表される音であるのに対し（かつては gi と表せる音であった）、「奇」または「欺」は qi（かつては ki であった）と表される音で、有気音と無気音の違いではあるが、漢語では明確に区別される音である（ただしロシア語には有気音と無気音の対立はないため、両方とも tsi または ki と聞こえたかもしれない）。したがって、「吉烈迷」と「奇勒爾」は中国でははっきりと区別され、字が使い分けられていた。しかも、使用された年代は「吉烈迷」の方が「奇勒爾」より遙かに古く、元代、明代の「吉烈迷」は現在のギリヤーク（またはニヴヒ）の祖先だけでなく、周辺のツングース系住民まで含んでいた可能性が高いが、「奇勒爾」は明らかにアムール川左岸の森林地帯のツングース系狩猟民だけを指していて、そこにギリヤークの祖先が入る余地はほとんどない。

ロシア語の「ギリヤーク」という呼称の語源についてはこれまで多くの意見が出されたが、今のところ最も有力なのはその周辺に居住するツングース系住民、すなわちウリチ、ナーナイ、オロチ、ネギダールらが彼らに対して使っていた「ギリヤミ」гилями、「ギレミ」гилэми、「ギレケ」гилекэ、「ギリヤハ」гиляха などの呼称がもとであるとするものである。そしてそのもとの意味については、「下流方面に住む者」または平底の舟（アムール川の住民はこれを広く「ギラ」гила と呼ぶといわれる）であるという（Таксами 1967: 5; 1975: 66; Смоляк 1975: 25）。

研究が進んだ「ギリヤーク」の語源に比べて、「キレ」kile、「キレル」kiler、「キレング」kileng、「キリン」kilin といった中国で北方ツングースを総称的に呼ぶのに使

われた呼称の語源の研究は全く進んでいない。シロコゴロフは、この名称の語源を中国東北地方の地名である「吉林」に求めた。すなわち、明代にアムール川流域に進出した漢族が北流松花江の流域で当時その地域にいた北方ツングースに遭遇し、彼らをもその地名で呼んだのが始まりだというのである（シロコゴロフ 1941: 663）。「吉林」は満洲語の *Gilin ura* に由来するが、シロコゴロフにいわせれば、中国人には *Kilin* として受け取られたという（シロコゴロフ 1941: 663）。しかし、これはもはや検証することができない仮説である上に、*Gilin* と *Kilin* の子音の交替にも問題があり（上記のように、*gi* と *ki* は漢字で区別されることが多い）、信憑性は低い。現在のところは、この呼称が満洲や松花江、アムール川などの流域の住民に採用されて、エヴェンキに代表される北方ツングースあるいはそれを祖先に持つ人々を指す呼称として使われたということがいえるにすぎない。

4.3 オロキ、オリチ、オロチの名称の由来について

これらの名称はカタカナで表記すれば同じようなものになってしまうが、ローマ字またはロシア字表記では *Orok/Ороки*, *Olcha/Ольчи*, *Orochi/Орочи* と微妙に異なる。しかし、シュレンクは *l* と *r* の区別のない日本語から連想したかのように、これらを同じ語からの派生であるとした。しかし、そこにはいくつか彼の思い違いがあったようである。

まず「オリチ」*Ольчи* についてであるが、これをシュレンクが使い始めたのは彼の先駆者たちからの影響であった。スモリャーク *A. B. Смоляк* によれば、1860年に樺太を調査したグレン *P. Glehn*, シュミット *F. Schmidt*, ブリュルキン *A. Брылкин* らが樺太のオロキとアムール川下流域のマンガンの名で知られていた住民とを同族と考えて、オロキの自称の1つである「ウリチャ」*Ульча* または「ウリタ」*Ульта* をマンガンの方にも適用してしまったのがこの名称の由来であるという（*Смоляк 1975: 35*）。

従来「オリチ」（または「ウリチ」という。*o/o* と *u/y* は音が近いためしばしば入れ替わる。現在は「ウリチ」*Ульчи* の方が正式の名称になっている）という名称の語源については、様々な議論があった。シュレンクは、前述のように、北方ツングース語でトナカイを意味する「オロン」*орон* に語源を求め、*r/p* と *l/л* が交替してオリチ *Olcha/Ольчи* になったと考えていた。しかし、同じくトナカイ飼育民に起源を求める説でも、オロキの自称であるウリチャ *Ульча* やウイルタ *Uilta* の場合には彼らの言葉でトナカイを表す「ウラ」*ула* に語源を求める説（*Народы Сибири 1956:*

855; Смоляк 1975: 36)が有力である。

また、トナカイに語源を求めない説もある。ゾロタレフによれば、シュミット P. Schmidt は三つ編みのお下げを意味する「オリ」оль, 「ウリ」уль に起源を求め、「オリチャ」とはお下げを持つ者を意味すると解釈し、リプスキー А. Н. Липский は ul/уль がアザラシを表すとする説と満洲語の川を表す ula が語源であるとする 2 つの説を提唱したという (Золотарев 1939: 34)。しかし、ゾロタレフ А. М. Золотарев 自身はこれをウリチ語ではなく、ツングース語全体に共通の言葉で解釈すべきだとして、これに近い言葉で魚を表す ollo/олло, oldo/олдо, olra/олра にその語源を求めた (Золотарев 1939: 34-35)。しかし、上記のスモリャークのいうようにこの名称自体がウリチ・ウイルタ同族説という錯誤から生まれているとすれば、その語源はオロキの自称「ウリチャ」や「ウイルタ」の語源を求めるだけで済むはずである。そして、それは上記のようにシュレンクのいう北方ツングース語の「オロン」の方ではなくオロキ語 (ウイルタ語) の「ウラ」の方である。

しかし、ここでもう 1 つ注目しなければならないのが、シュレンクとマークが 2 人とも「オリチ」(またはその単数形の「オリチャ」または「オルチャ」) をマンガンともいわれた住民の自称であると述べている点である。彼らがその情報を得たのは 1850 年代であり、シュミット F. Schmidt の調査以前である。ゾロタレフは、ウリチ (1920~30年代に活動したゾロタレフは「オリチ」, 「オルチャ」の代わりに「ウリチ」Ульчи という呼称を使う) という名称は彼ら自身も使うが、それは他の民族の成員との会話で使われるものであって、彼らどうしの会話では用いられないと述べている (Золотарев 1939: 33)。またスモリャークは 1947 年の調査において、しばしばインフォーマントたちから「なぜ自分らをウリチと呼ぶのか」と聞かれたくらいこの名称は彼らの間ではなじみがなかったと書いている (Смоляк 1975: 36)。マーク、シュレンクらは対ロシア人用の自称を教えられたともいえるが、17世紀のコサックたちを除けば彼らはウリチの祖先に出会った最初のロシア人に属する。

これに関しては 2 つの可能性が考えられる。1 つは、かねてよりロシア人が自分たちを他のアムール地方やシベリアの先住民と一緒に「オロチョン」に類する名称で呼んでいるのをウリチの祖先たちが知っていて、マークやシュレンクたちにもそのつもりで「オルチャ」, 「オリチ」に類する自称を名乗ったという可能性である。そのとき、シュレンクのいうように、途中の r/p が l/л に交替してしまった。もう 1 つは「オリチャ」という名称の氏族 (ハラ hala) に由来するという可能性である。ウリチには「オリチャ」Ольча という名の氏族があり、これはウイルタ起源でニヴフと混交

して成立した氏族であるとされる (Золотарев 1939: 26)。となると問題は再びオロキ・ウリチ同族説に舞い戻ってしまう。しかし、シュテルンベルクやゾロタレフ、スモリャークなどの研究をまとめると、現在のウリチという民族あるいは「民族」の歴史は、様々な地域からの様々な出自と文化を持った人々の融合過程であるということが出来る。したがって、部分的にはオロキ (ウイльта) と同族といえる人々もいるが、同時に「アイヌと同族」, 「ギリヤーク (ニヴヒ) と同族」, 「ゴリド (ナーナイ) と同族」といえる人々もいるわけで、この民族を周辺民族と一義的に関係づけることはできない。

ところで、オロチ **Орочи** という名称の由来についても、語幹にある「オロン」 **орон/орон** がトナカイを意味するとして、これも彼らがかつてトナカイ飼育民だった事実から発生した、またはこの名称自体がトナカイ飼育エヴェンキから生まれた証であるとする説があった (Патканов 1906: 74; Штернберг 1933: 396-400)。しかしこれについてもスモリャークは、「オロン」というのはエヴェンキ語などに見られるようにトナカイを表すのではなく、子熊を意味すると主張する。そして、このことはまたオロチの起源説話に女性と熊が結婚することによってオロチが生まれたというものがあることと整合するという (Смоляк 1975: 56)。

4.4 オロチとウデへの分離の可否について

シュレンクの記述と彼の作成した民族分布図では、ウスリー川右岸やアムール川右岸の山岳地帯から日本海沿岸にかけての広大な地域がオロチ **Орочи** の居住地域となっている。しかし、この点は後の調査によって修正を余儀なくされた。

沿海地方の南部の住民が北部の住民と言語的、文化的に若干異なっているということは既にシュレンクも指摘しており、彼はこれに「ターズ」 **Тазы** という名称を付けた。この点については彼と相前後してこの地方の日本海沿岸を調査した研究者、すなわちマルガリートフ **В. П. Маргаритов**, プライロフスキー **С. Брайловский** (彼は1897年の全ロシア国勢調査の際に沿海州を調査している) なども同様な指摘はしている。しかし、シュレンクは「ターズ」を中国の影響が非常に強い「オロチ」であると考えたのに対し、マルガリートフとプライロフスキーはこの「ターズ」をも含めた沿海地方南部とウスリー川流域の住民の言語的、文化的独自性を認め、その北隣の日本海に注ぐ河川流域に住む人々とは異なる独立した民族と考えた。そして特にプライロフスキーはその自称がウデへ (彼はウジへ **Удихэ** と表記する) であることを初めて明らかにした (Брайловский 1901: 149; Патканов 1906: 75-76; Смоляк 1975:

57-58)。

ブライロフスキーは1897年の全ロシア国勢調査の際に沿海地方のオロチの調査を受け持った。その際に彼は日本海沿岸を北から南へ行くと、途中コッピ川とポッチ川の間で言語が変わり、コッピ川流域の村で採用した通訳がポッチ川以南では使えなくなったという経験をしたのである。(Брайловский 1901: 148-149)。そして、彼はポッチ川で新たに頼んだ通訳から次のような説明を受けた。

コッピ川より北の皇帝湾やさらに北の地域には『オロチョン』(このオロチョンはオロチと同義—筆者)が住んでいて、頭から下げている三つ編みのお下げは1本である。それに対してポッチ川から南のサマルガ川やさらにその南の地域には『ウジヘ』が住んでいる。中国人は彼らを『ターズ』と呼んでいて、お下げは2本である (Брайловский 1901: 148-149)。

この説明は、ポッチ川流域にいた人々が北隣のコッピ川流域以北の人々に対してお下げの本数を1つの指標として他区別をしていたこと、北の人々をロシア人の呼称にあわせて「オロチョン」と呼び、自らは「ウジヘ」と称していたこと、自分たちが中国人から「ターズ」と呼ばれていることを知っていたことを物語っている。すなわち、19世紀末当時ポッチ川とコッピ川を境にして沿海州の住民が2つの集団に分かれていることを住民自身が意識していたわけである。

このウデへ独立民族説は一時パトカノフ С. Патканов によって否定された。彼は1897年の国勢調査資料からツングース系住民の統計学的、民族学的資料を整理した際に、日本海沿岸からウスリー川の支流域に居住するオロチたちの間には民族を異にするといえるほどの差違はないとして、すべて「オロチ」と呼ぶことを主張した(Патканов 1906: 78-79)。また、1902年から1912年にかけて沿海州を調査したアルベルト F. Albert もオロチ、ウデへの両者には言語にも物質精神文化にも有意な差はないという意見を述べている (Albert 1956: 43)。

しかし、その後有名なアルセーニエフ Р. К. Арсеньев のシホテ・アリニ山脈での地理学的、民族学的調査などに代表されるような様々な学術調査が進展するにしたがって、ブライロフスキーが主張したように、日本海沿岸北部に比較的まとまって住んでいる人々と、それより南に拡散して住み、ウデへに類する呼称を自称とする人々とを区別することが妥当とされるようになった。特に、1927年から28年にかけて行われた国立人類学研究所と中央民族博物館とによるツングース系諸民族の調査を指導したクフチン Б. А. Куфтин は「ソヴィエツカヤ・ガヴェニとフンガリーのオロチの、

人口の上でより多数を占めるウデへに対する民族的独自性」を明確にしたといわれる(Ларькин 1964: 13)。その結果、1929年に発行された統計資料『1927年～28年におけるアムール川下流域の原住民の経済状態(1928年の調査資料に基づく)』(ハバロフスク・ブラゴヴェンシェンスク, 1929年) *Туземное Хозяйство Низовьев Амура в 1927–1928 году (по материалам обследования 1928 года)*, Издание Дальхот-союза и Далькрайсоюза, Хабаровск-Браговешенск 1929 (略してТХНАとする)では、「ウデ」Удэ という形で正式に人口、戸数、その他の統計に姿を現している(ТХНА 1929: 28–31, 39–41)。現在ウデという名称はロシア語風にウデゲイツィ Удгейцы (男性単数形が Удгеец, 女性単数形が Удгейка である)と改められ、学術上の民族とともに行政上の「民族」としても登録されている。

4.5 サマギールとキリを独立した「民族」とするか否かについて

この問題は単にいかにかに民族学的または人類学的な民族を認めるのか、あるいはいかにかに行政的な「民族」を設定するのかという問題だけでなく、シュレンクの調査時以降の所属民族の変更、あるいは人類学的な民族境界の変化、すなわちエスニック・プロセス ethnic process までが絡んだ問題である。

まずシュレンクがクル・ウルミ川の近くのゴリド(現在はナーナイと呼ばれる)から聞いたという不確かな情報から設定した「キリ」という民族については、早くも19世紀の終わりにはその存在が疑問視されるようになった。例えば、パトカノフは1897年の国勢調査記録にはクル・ウルミ川流域には「キリ」というグループは見当たらないと述べている(ただし、彼自身もこの資料がこの地方に関しては不備である点を認めてはいる(Патканов 1906: 30))。当時の調査でクル・ウルミ川流域にいたとされるのは、ゴリド(ナーナイ)、オロチ(今日のウデへ?)とツングース(エヴェンキ)であった。その内訳はゴリドの6つの氏族(ベリデ Бэльгэ, Донка Донка, Мофа Мофа, Ожарль Одзял, Удинка Удынка, Юкаминка Юкаминка)が15の集落に住み、オロチの4つの氏族(Амринка Амулинка, Келендига Келендига, Суанка Суанка, Чеロンдига Челодинга)が3つの集落に、そしてツングースの8つの氏族が10の集落とキャンプ地に暮らしていたことになっていた。人口的にはゴリドが最も多く、男女合わせて253人、オロチは35人、ツングースは132人であった(Патканов 1912: 965–966, 972–973)。この国勢調査ではクル・ウルミ水系に合わせて26の集落が認められたが、いずれも上記のシュレンクが聞いた集落名(ヒヤ・マンガ, イヴ, アジ, クジナホ)とは一致しない。

集落の居住状況を民族別に見ると、1つの集落に複数の民族がいるケースもあるが、ほとんどの集落で1つの民族しかいない。複数の民族が共住していても、多くの場合1つの民族が数的に他を圧倒している。そしてその分布状況は、ゴリドの集落がクル川とウルミ川が合流したツングースカ川流域（つまりアムール川本流に近いところ）に集中しているのに対して、オロチ（ウデヘ）とツングースの集落はクル川やウルミ川（特にツングースはウルミ川方面に多い）流域と比較的アムール川本流から遠いところに集まっている。

1897年の国勢調査よりも40年以上前にアムール地方を調査していたシュレンクが記録したキリという民族が国勢調査の時点でクル・ウルミ水系に見当たらなかった点について、パトカノフは同様の名称を持つゴリドの「キレ」あるいは「キレン」という氏族がアムール川の下流方面（ニージェタンポフカ郷）やアニュイ川、松花江方面に見られることを指摘しながら、次のように推論している。すなわち、彼らはその40年の間にアムール川本流方面に移住してしまい、その居住地は近くにいたゴリドの他の氏族やツングース、オロチに占められてしまったというのである（Патканов 1906: 171）。また、彼はキリという名称がゴリドのツングースに対する呼称キレに近いことから、シュレンクはクル川のツングースをそのような名前で記録してしまった可能性もあると述べている（Патканов 1906: 172）。

しかし、クル・ウルミ水系の人々に関するその後の言語学的な研究の進展を考慮すると、パトカノフの推論には首肯し難い。彼の推論の要点は、シュレンクのキリという民族は完全に水系から出てしまい、ゴリドのキレ氏族と化してアムール川下流域各地に分散し、その故地は他のゴリドやツングースに占拠されたということである。しかし、パトカノフと同時代にゴリド（ナーナイ）のシャマニズムについての研究を残したシムケヴィチ П. Шимкевич は、パトカノフがツングースカ川のゴリドの氏族として挙げたウディンカ、ドンカ（シムケヴィチはドーンカ доонка とする）、ユカミンカ（同ユコムザル юкомзал）について次のように述べている。

ある中国の役人から得た情報によれば、これらの3氏族（ウディンカ、ドーンカ、ユコムザル—筆者）は皆キレン килэн,あるいは松花江のゴリドに従えばキレセル килэселл と呼ばれている。つまり、これらの氏族は様々な理由によってある者はアムールへ移住して他の氏族と混ざり、ある者はウルミ川やクル川流域に留まったのである。これらの3氏族が互いに近縁関係にあるということは、まず第1に今に至るまで彼らどうしてキレン килэн と呼びあっていたことが証明している。そして何よりも重要なのは、彼らがプニ（死後の世界—筆者）に行くのに独自の路を持っていることである。それを記述することは、これ

らのゴリドたちの過去について考え直し、そして彼らがウルミ川とクル川の上流方面からやって来たツングースのトナカイ飼育民の子孫であるとの仮説に正当性を与えてくれる。既に1856年にウルミ川の河口で調査したシュレンクが、ゴリドたちがウルミ川に住む人々をキレ *килэ* と呼んでいたと述べているのである。(Шимкевич 1896: 17)

つまりシムケヴィチは、シュレンクがキリと呼んだ人々がこれらの氏族で構成されており、さらには1897年の時点で「ゴリド」として登録されたこれらの3氏族は40年前にシュレンクによって「キリ」という民族として分類されていたことをはっきりと追認しているのである。そして、シムケヴィチはこの引用に続いて彼のインフォーマントだったラーバ・ユコムザル *Лаба Юкомзал* の情報に基づき、キレンと自称し、また呼ばれる人々がいかに他のゴリドたちと異なる方法で死後の世界に旅立つかを説明する。端的にいえば、他のゴリドたちがアムール川の岸辺を犬ぞりに乗って旅立つのに対して、キレンたちはトナカイに乗って旅立つのである。それには9頭のトナカイが必要で、内8頭が死者の財産を運び、残る1頭が彼の魂を運ぶのだという。そのためにキレンの死者の旅は他のゴリドたちのよりも遙かに楽で短いのだという(Шимкевич 1896: 18)。ここで注意しなければならないのは、既にこのキレンたちがシュレンクの調査時点でトナカイ飼育を行っていないという事実である。それにもかかわらず死者がトナカイに騎乗して旅立つというのは、彼らが近い過去までトナカイ飼育に従事していた証拠だともいえる。

シュレンクはシムケヴィチが述べたような証拠を知らなかったが、彼らを独自の民族として分類したのにも彼なりの根拠があった。それは、ツングースカ川河口周辺にいたゴリドたちが、このキリ集団の人々を自分たちと異なっており、狩猟がうまく、毛皮をたくさん生産し所有する人々であると認識していたことである。シュレンクはキリと呼ばれた人々自身の意識を確認していないため、彼らが現在の人類学でいう民族かどうかは確認することはできないが、少なくとも隣接する人々からは区別されていたことは事実のようである。

さらに、この地域の言語は本来他の地域のゴリド語(ナーナイ語)とは異なるという説もある。この地域の住民がアムール川本流の人々ともにゴリド(ナーナイ)であると規定されて以来、彼らの言語はナーナイ語クル・ウルミ方言と呼ばれて、ナーナイ語の1方言とされてきた。しかし、その後の語彙の比較研究などを通じて、アムール川本流のナーナイ語とは相当異なることが指摘されるようになり、他の隣接する方言とあわせて「キリ語」という独特の言語を構成するという解釈も現れている(風間 1997: 114)。その名称がシュレンクの「キリ」に由来するものであることはいうまで

もない。

このキリを言語学者がいう「ナーナイ語クル・ウルミ方言」を話すナーナイの一部と解釈するのか、エヴェンキ語を話すツングースとみなすのか、はたまた「キリ語」というナーナイ語にもエヴェンキ語にも含まれない独特のツングース系の言語を話すキリという民族を別に設定すべきなのかは、彼らの言語、文化に対する研究者たちの解釈次第であるという側面を持っている。ナーナイ、ウリチなどのアムール川下流域の諸民族の帝政ロシア、ソ連時代の居住状況や氏族構成を研究した A. V. スモリャークは、結局シュレンクのいうキリはツングースカ川に居住する独特の言語を話すナーナイであり、ナーナイたちがエヴェンキを指している「キロール」やナーナイの氏族の1つであるキレとは区別すべきであると主張した (Смоляк 1975: 42)。これはソ連の民族政策に沿ったソ連民族学の公式見解となる。

キリをエヴェンキやナーナイのキレ氏族と区別すべきであるというスモリャークの指摘は卓見であるが、「ツングースカ川に居住する独特の言語を話すナーナイ」であると結論付けるのは、今から見れば性急すぎたかもしれない。既に述べたように、キリはシュレンクが調査した1850年代には独自の民族と規定されても不自然ではないほど、アムール川本流のゴリド (ナーナイ) たちとは言語的にも、文化的にも、意識的にも異なっていたかもしれないのである。そして、1850年代から97年までの間に、調査者には区別がつかないほど両者の距離が接近した。その理由はアムール川本流からやって来る本流のナーナイ (ゴリド) たちの強烈な言語的、文化的影響である。

その過程が比較的明確に確認できるのが、ゴリン川流域にいたとされる「サマギール」と呼ばれた人々である。彼らは、そのほとんどがゴリン川流域に住み続けていたことと、人口が425人 (1897年) とクル・ウルミ水系 (ツングースカ川も含む) の住民を上回る規模でありながら彼らよりはるかに密集して暮らしていたことなどが関係して、研究も進み、彼らの言語や文化の変化の様子がよく観察された。

ゴリン川のサマギールは1897年の国勢調査以降も根強く独自の民族あるいは行政的な「民族」として認められてきた。シュレンク、マーク以来続いたサマギール独立民族説を覆したのは、カルゲル Н. Г. Каргер とコジミンスキー И. И. Козьминский がシュテルンベルグの指導の下に1926年に行った「ガリン・アムグニ調査旅行」である。これはゴリン川とアムグニ川流域に住むサマギールとネギダールの調査であった。この調査の主な目的の1つに、サマギールが独立した民族か否かということをはっきりとすることも含まれていたのである (カルゲル 1944a: 34)。

カルゲルはこの問題について、まずその集団の自称と彼らが持つ言語の特性から、

ナーナイの1下位集団であり、1つの氏族であると結論付けた。そして、その名称はサマル Samar/Самар であり、サマギール Samagir/Самагиры は古い形であるということもわかった。しかし、彼は同時にその由来がエヴェンキにあることも指摘している。というのは、彼らにはブレヤ川方面からアムール川やアムグニ川、ゴリン川を通して現在の居住地にやって来たという伝承が残されており、その言語にはエヴェンキ語の影響が色濃く残っていたからである。特に言語の面では、形態的にエヴェンキ語に近い部分があっただけでなく、老人だけが知っていて今は廃語となった単語がエヴェンキ語であったこと、カルゲルたちの調査当時サマル氏族の成員にとってエヴェンキ語の修得が比較的容易であったことなどの特徴があった（カルゲル 1944a: 38-41）。

この言語に関する指摘はサマル氏族のたどったエスニック・プロセスを端的に表している。1926年の段階で老人だった人々はシュレンクらが調査した当時はまだ幼い子供であったはずだが、その頃覚えた言葉にエヴェンキ語に近い単語が入っていたわけである。ということは、19世紀中期段階ではシュレンクらが他のアムール川本流域のナーナイ（ゴリド）たちとは区別し、よりエヴェンキに近い独自の民族であると想定しても誤りとはいえない状態にあったといえよう。それが1920年代までの間にアムール川本流のナーナイとの同化が進んで、その下位グループといえる状態になったのである。

サマギールがエヴェンキにではなくナーナイに同化していったのには、彼らの移住方向が関係している。彼らの集落は時代を追って、ゴリン川の上流からアムール川との合流点へと位置を変える傾向がある。前述のように、シュレンクの時代にはゴリン川上のサマギールの最も下流に位置する集落とゴリン川河口にあるナーナイの集落との間には120～130露里（約130～140 km）もの隔たりがあったのに対し、カルゲルらの調査時にはこの間に2つの集落があった（カルゲル 1944b: 55）。そして、パトカノフがまとめた1897年の国勢調査の結果によれば、ゴリン川河口周辺はゴリドとサマギールの混住地域とされていた（Патканов 1906: 巻末地図）。彼らが下流方向へ移動する傾向を持つことについて、カルゲルはその理由を次のようにいう。

宿営地からの移住が死亡（通常は伝染病の結果として）に原因するならば、流れにそって下流に移らねばならぬ。なぜならば、死の原因を与えた悪霊が移住者の後を追跡し得る痕跡が、かような場合には航行する小舟によって残されないからである（カルゲル 1944a: 43）。

しかし、サマル氏族のアムール川本流方面への進出には、カルゲルのようなコスモロジー的な原因だけでなく、アムール川本流の方が日常必要な中国や満洲方面からの物資が得やすいという経済的な要因も考えなければならない。

ゴリン川流域のサマギールとアムール川本流の住民との接近は19世紀後半から20世紀前半に初めて起きた現象ではない。彼らが初めて中国の清朝と接触したのは1661年であり（注5参照）、その際当然、中国から来た役人や軍人とともに、彼らを案内してきた松花江やアムール川本流の住民たちとも接触したはずである。そして清朝全盛期の乾隆時代の毛皮貢納台帳（三姓副都統衙門檔案の一部）によれば、サマル氏族の祖先はゴリン川河口を中心とした地域のどこかにあったキヘチェンという村（この村は後の民族誌資料からは同定ができない）でトゥメルルという氏族と共住していることになっていた（三姓副都統衙門満文檔案訳編 1984）。このトゥメルルは現在のトゥマリという姓を名乗る人々の祖先であり、トゥマリと名乗る人々はナーナイとウリチの双方にまたがっている。つまり、部分的ではあるが、サマギールの祖先は少なくとも18世紀以来アムール川本流の人々と緊密な関係を持っていたわけである。

4.6 マークが提唱したゴリド（ナーナイ）内部の3つのサブ・グループについて

先に述べたように、マーク P. K. Maak は松花江からアムール川にかけて住むキレング族、アムール川に沿ってウスリー川河口あたりまで住むホゼング族、そしてそれより下流に住むゴリド族と3種類の民族がいるように記している。しかし、彼自身この3つのグループが実はゴリドという1つの大きな民族集団の下位集団ではないかということも指摘していた。しかし、それに対してシュレンクは、中途半端な切り方を行って人々を混乱させるよりは、松花江、ウスリー川からアムール川の下流のオリチの居住地までの地域に住む人々をゴリドという1つの民族としておく方がよいと主張した。

2人のこのような指摘は、19世紀中期における松花江下流域からアムール川流域にかけての住民の民族的な集団構成を考える上で非常に興味深い。

現在はマークが指摘したような3区分は人類学（民族学）的にも行政的にも認められていない。しかし、松花江上では今でも中国の学者によってキレングとホゼングに対応するような下位区分（方言分類）が認められている。すなわち、中国の言語学者は松花江の赫哲語を「奇勒恩方言」と「赫真方言」という2つの方言に分類している（安俊 1986: 1）。両者の境は勤得力という村にあり、その話者はそれぞれ「奇勒恩」

と「赫真」と自称していたという。したがって、「奇楞恩」がマークのいう「キレング族」に対応し、「赫真」が「ホゼング族」に対応すると見て間違いなさそうである。中国側の説明によれば、下流側の「赫真方言」がロシア側のナーナイ（ゴリド）たちのナーナイ語（ゴリド語）とほとんど同じなのに対して、奇楞恩方言は松花江に見られる独特の方言であるという。

松花江の赫哲語の資料を再検討した風間伸次郎によれば、赫哲語奇楞恩方言はオロチ語やウデヘ語などに近い傾向が見られる独特の言語であるという（風間 1996a）。そして、ナーナイ語クル・ウルミ方言とされている言語（風間はこれをエヴェンキ語と基層を共有すると考えている）と共通性が高く、さらにナーナイ語ビキン方言（ウスリー川方面の方言、風間はこれは明らかにナーナイ語の1方言としての特徴を持つとしている）とも共通性を持ち、この3方言（あるいは言語といった方がいいかもしれない）で1つの「言語圏」を形成するという説を主張した（風間 1996a: 134-135）。

松花江流域にアムール川本流のナーナイとは言語的に異なる人々が住み、キレ、キレンに類する自称を持つのは、彼らがアムール川左岸の支流域からの移住者であることを示している。松花江のナーナイ（赫哲族）の間にはキレ、ウディンカ、ユカミンカといった氏族（ハラ）の出身者が含まれる。すぐ前でも述べたように、ウディンカとユカミンカはクル・ウルミ水系（ツングースカ川を含む）にもいた氏族であり、キレはアムール川左岸方面から本流に進出した氏族である。風間は言語的には赫哲語奇楞恩方言とナーナイ語クル・ウルミ方言とは出自が異なるとしていることから、慎重を期して両言語が1つの「言語圏」をなしていると述べるに留めているが、奇楞恩方言の話者の出身氏族（おそらくキレ、ウディンカ、ユカミンカなどからなる）の来歴を調べれば、クル・ウルミ方言との関係についてもっと積極的な説を主張できたのではないかと考えられる²²⁾。

中国側の赫哲族の方言研究からもわかるように、現在人類学や民族学において1つの民族として語ることが当たり前のようなっているナーナイ（ゴリド）は、国境によってナーナイと赫哲族に分かれているというだけでなく、そのよう行政的な区分とは別に、言語集団によってさらに細かく区分できるようである。となると、言語を基礎として分類するというロシア、ソ連の民族学の民族分類は、このナーナイ（ゴリド）に関しては実態に則していないことになる。とりわけ、言語の基層的な部分からして異なるクル・ウルミ方言と奇楞恩方言の話者たちはアムール川本流のナーナイとは異なる民族とすべきだったのであり、その意味でシュレンクのキリという民族の設定には言語学的な根拠があったといえる。

しかし、住民自身の意識は言語の異同と直接連動するとは限らない。シュレンクやマークの時代を生きた人々はこの世にいないため、もはや実際に確認することはできないが、松花江からアムール川河口近くまでの地域に分布する氏族や地域集団の移住の歴史や、アムール川本流域の人々の支流域や最下流域の人々に対する呼称（キレ、キャカラ、ギレミなど）とその指し示す範囲を吟味していると、松花江流域からニヴヒ（ギリヤーク）の居住地域までのアムール川本流域に住むツングース系の言語を話す住民の間には一種の同類意識が感じられる。それは「本流の民」とも呼ぶべきもので、ナーナイ、ウリチたちの自称の一つである「マンボーナイ」や「マングーナイ」（あるいは「マングーニ」）という呼称に象徴される。

しかし反面、アムール川本流域に認められるナーナイ（ゴリド）の地域的な下位集団や地域化した氏族の隣接集団に対する呼称を考慮すると、日常的にはナーナイ全体を貫く共属感覚や共属意識などはなく、それらはそれぞれの地域集団や氏族の中でのみ意識されていたとも考えられる。例えば、1920年代から40年代にかけてナーナイの調査を行ったリプスカヤ Н. А. Липская はナーナイの間での相互呼称の例として、下流方面の人々が上流方面を指してゴルディ голди と呼び、逆に上流の人々が下流を指してヘジェン хэдзээн と呼ぶということを記している（Левин и Потапов 1956: 787）。意味は上流の住民、下流の住民ということである。もっとも、ナーナイよりも下流にいるウリチとされる人々はナーナイをゴルディ голды と呼び、ナーナイたちはウリチをヘジェンケン хэдиэнкэн と呼ぶことから、ゴルディ＝ヘジェンの呼称関係は居住地の相対的な上流下流関係によるものである。ちなみに、コムソモリスク・ナ・アムールからハバロフスク辺りまでの住民は、さらに上流にいる松花江方面の住民をソルディ солды, ソルドン солдон などと呼ぶらしい（Левин и Потапов 1956: 787）。さらに、住んでいる流域や湖沼の名前、村の名前などを付けて呼びあうこともあった。

アムール川本流沿いにおいては、言語、文化のどの要素を取り上げるかによって異なる分類が可能になる。先に触れた言語による分類もその1つにすぎない。もし、民族という分類をあくまでも住民の帰属意識とそれと連動した自他区別の意識に準拠するならば、おそらくシュレンクやマークの時代には明確な境界が設定できなかったのではないだろうか。例えば、沿海地方のオロチの自己意識について、レオントヴィチ С. Леонтович は「互いに近い親縁関係にあるはずの様々な集団の間でも、同じ民族に属しているとか、共通の利害関係にあるといった意識は存在しない」（Леонтович 1897: 50）と述べている。また同様にウデヘという民族の存在を主張したブライロフ

スキー С. Браиловский も、「彼ら（沿海地方の先住民たち—筆者）が自分たちは1つの民族であり、別々なのだと意識するのに私が遭遇したのは実に希で、例外的な出来事があった時だけであった」（Браиловский 1901: 358）と述べている。これらの感想は、人類学的な民族は帰属意識からは見えてこないことを指摘している。また、メモリャークは調査経験からさらに一步踏み込んで次のようなことを述べている。

アムール川下流域においては、ナーナイ、ウリチ、ウデヘなどのツングース系住民は互いに遠く離れて小さな集団で暮らし、文化も言語もその由来も異なるため、民族的な一体性（этническое единство）というものは意識していない。それが存在するのは、氏族の中か、複数の氏族からなる地域集団（例えばボランカン Боланкан、ナイヒンカン Найхинкан など（それぞれ「ボロン湖の人々」、「ナイヒン村の人々」という意味—筆者））、または場合によって行動を共にすることがある近隣の地域集団の集合体の中だけである。より遠い集団（100 km 以上遠方の集団）に対しては、一緒に行動する機会も少ないため、よそ者と感じられる。（Смоляк 1975: 52）

これはロシア移民が大量に流入する以前のアムール川下流域の住民たちの集団帰属意識を最も的確に言い表している。つまり民族、「民族」などの境界は、このような住民自身の意識を利用しながらも、結局は外部の者が恣意的に引く以外に設定できないのである。シュレンクが暫定的に「ゴリド」という広大な地域にまたがる民族を設定してしまったのも、言語を最も重要な基準にしつつも、他の文化要素や住民の意識なども考慮に入れていたために、文化的にギリヤーク（ニヴヒ）との共通性が高いオルチャ（ウリチ）のところまで境界線が見えなくなってしまったのではないかと考えられる。

5 民族から「民族」への転換

シュレンク以降の本格的な調査研究によって、19世紀末期から20世紀前半までの50年間でアムール川下流域と沿海州の先住民の民族分類と呼称は徐々に今日の状態に近づく。研究者個人のレベルでは慣用や各人の方針があって、様々な呼称が用いられるが、全体的な傾向は国勢調査の結果に端的に現れた。

まず、1897年に初めて行われた全ロシア規模の国勢調査ではアムール川下流域と樺太の諸民族はほぼシュレンクの分類に則って分類された。すなわち、「ゴリド」Гольды、「オリチ」Ольчи（または「マングン」Мангуны）、「オロチ」Орочи、「ネギダール」Негидальцы、「サマギール」Самагиры、「キリ」Кили、「オロキ」Ороки、「ツングース」Тунгусы、「ギリヤーク」Гиляки、「アイヌ」Айны である（付記した

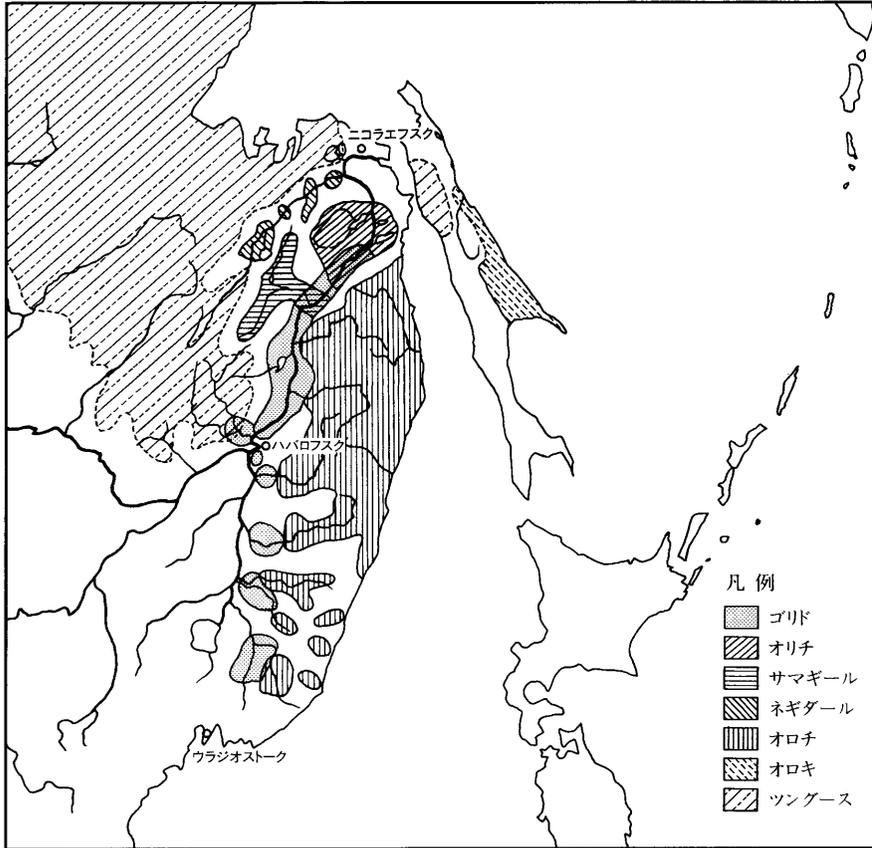


図12 1897年当時のツングース系住民の民族分布 (Патканов 1906: 折込地図)

原語はロシア語の複数形で表している。ツングース系諸民族の分布は図12参照)。

1897年の国勢調査資料を整理して19世紀末期のツングース系の住民の状況を概説したパトカノフは、上記のようにオロチからウデヘを分離させないことを主張するものの、サマギールとキレの存在については懐疑的であった。例えば、キリについては既に前章の4.5で触れたように、シュレンクがキリの居住地であると述べたクル・ウルミ水系(またはツングースカ川)にはそのように名乗る住民はいなかったと述べている。そしてサマギールについても、1897年の調査では独自のサマギール語の話者はわずか10人だけで、大多数は自分たちを独自の「民族」であるとは考えておらず、ゴリドの1氏族と考えていたという(Патканов 1906: 150)。

したがって、早くもシュレンクの調査から半世紀も立たないうちに彼の分類は修正を余儀なくされ始めたのである。しかし、この1897年の資料の持つ意味は大きい。な

ぜならば、シュレンク以来民族学者たちが学問的に規定してきた民族を初めて正式に行政側が認知し、国勢調査に際して住民の分類の手段として利用したからである。つまり、この時点でシュレンクが設定した民族学的な民族が行政的な「民族」へと初めて転換したのである。

1897年の国勢調査以前にも地方ごとに調査が行われていることから、以前にも「民族」設定の動きはあった。例えば、沿海州 Приморская область（当時の「沿海州」は今日の沿海地方、ハバロフスク地方、マガダン州、カムチャツカ州、サハリン州、チュクチ自治管区、コリヤーク自治管区を含む広大な地方だった）では1873年にアムール川沿岸のソフィースク管区で人口調査が行われたことがあった（1870年代当時アムール川本流域はソフィースク管区 Софийский округ とニコラエフスク管区 Никораевский округ に分かれていた）。その時のデータでは住民はロシアとゴリドとの2種類にしか分けられていない。下流のニコラエフスク管区ではロシアとギリヤークとゴリドの3種類であった（РГИА ДВ ф. 1 оп. 1 д. 450 л. 25-27; ф. 1 оп. 1 д. 413 л. 53; ф. 1 оп. 1 д. 413 л. 81）。これは1850年代にロシアがアムール地方に再侵入を始めて以来、先住民たちに出会った軍人や開拓移民たちの慣用的な分類と呼称を取り入れたものと考えられる。この「ロシア」、「ゴリド」、「ギリヤーク」という分類もいわば「民族」である。そして行政側は先住民系のゴリド、ギリヤークと移民系のロシアとの間に一線を引き、異なる政策を適用している。非文明的な生活をしていると規定された先住民系の諸「民族」は形式的な行政的保護の対象とはなり得たが、基本的には放置され、地方政府が積極的に統治したのは移民系の人々であった。

この「民族」分類ではシュレンクのオリチまたはマングンと呼ばれる民族が認められていない。彼らの多くが「ギリヤーク」と分類されてしまったのである。そのような分類にも一理あった。外見的に違いが目立つ服装やクマ祭り（ギリヤークとオリチはアイヌのように仔グマを捕らえてしばらく飼育し、それを神の世界に送る飼いグマ儀礼を行う）といった移民や研究者たちの注意を引く儀礼などの面ではオリチとギリヤークとの共通性が高いこと、アムール川でも比較的上流にいるゴリドや支流域にいたサマギールなどがオリチとギリヤークを区別せずに「ギレミ」という呼称で呼んでいたことなどが関係している。つまり、言語の相違よりもより人々の注意を引きやすい文化要素を重視する分類がなされていたわけである。

しかし、移民が増え、先住民系の住民との接触が急増するにつけ、行政側も先住民に関してより詳細な情報が必要となってくる。1897年の国勢調査においてシュレンク以来の民族設定が基本的に採用されたことは、行政側も調査研究が進展していた民族

学や言語学の成果を積極的に取り入れようとしたことの現れである。そしてその結果、民族が「民族」として一人歩きを始めるのである。国勢調査資料を研究材料としたバトカノフが現実と資料とのずれを批判的に検証しようとしたのは、一人歩きし始めた「民族」に対して民族学者側からチェックしようとしたのだともいえる。

次に、1910年に行われた沿海州の調査では1897年以降の調査の結果を踏まえて修正がなされている。それによれば、当該地域の住民は「ゴリド」Гольды、「ギリヤーク」Гиляки、「ノニ」Ноны、「オロチ」Орочи、「ツングース」Тунгусы、「ネギダール」Негидальцы、「チュクチャギール」Чукчагиры、「ヤクート」Якуты、「タズ」Тазыとなっている（Шумский 1911: 12-13）。このうち、ヤクートは内陸シベリアのヤクートであり、19世紀後半からアムール川下流域周辺に出没し、ネギダールなどと接触していた。

この分類には興味深い点がある。

まず、今まで「オリチ」Ольчи と呼ばれていた人々が「ノニ」Ноны という呼称で分類されている点である。この呼称は彼らの自称である「ナーニ」Nani に由来する。アムール川下流域から樺太にかけて分布するツングース系住民に共通に見られる自称として Nani に類する呼称がある。実は「ナーナイ」Nanai/Нанай（より正確には /na: nai/）というのもその1つであり、オロチ、ウイльтаにも存在する。語源的には na という部分が「土地」、「場所」を意味し、-ni（または -nai）という接尾辞が「人」を表すとされ、訳せば「この土地の人」、すなわち「昔からこの土地に住んでいる者」という意味になる。

1910年の調査資料を整理したシュムスキー М. Шумский がいかなる目的で、またいかなる理論的基礎の上にこのような呼称を用いたのかについて、彼自身何も述べていない。おそらく当時シュテルンベルグ Л. Я. Штернберг らの調査によって、オリチ Ольчи、マングン Мангуны といった従来の呼称では住民の意識を十分反映させず、誤解を招くという意見が生じて、自称に近い呼称を採用したと考えられる。しかし、ノニまたはナーニという呼称は結局は研究者の間でも定着しなかった。

もう1つはチュクチャギール Чукчагиры という「民族」が設定されている点である。これはアムグニ川沿いの住民とされているが、現在ではネギダールの1氏族とされている。この氏族を他のネギダールと区別したのは、彼らがアムグニ川でも比較的上流（おそらくチュクチャギール湖周辺）に居住し、アムグニ川下流のネギダールとは離れていたためであろう。シュムスキーは「ネギダール」、「チュクチャギール」、「ツングース」では老人のみが自らをこのように呼ぶと述べているが（Шумский 1911:

13)、若者たちが自分らをどのように呼ぶか、またはどのような民族に属すと考えていたかについては触れていない。この時代の老人たちということは19世紀前半に生まれた人々ということである。彼らの間では、ネギダールという民族ではなく、研究者たちから民族の下位集団である氏族とみなされているチュクチャギールという集団の方が自他区別の指標として重要だったということになる。

第3に注目すべき点は、ウスリー川右岸の支流域、シホテ・アリン山脈、日本海沿岸に当たる地域であるウスリー地区の住民をオロチ **Орочи** とターズ **Тазы** に区分している点である。この区分は既にシュレンクが指摘し、1897年の国勢調査の時にプライロフスキーが「オロチ」と「ウジヘ」とを区分すべきであると主張していたが、パトカノフによって一時否定されていた。1910年の資料では区分すべきであるという説で整理されたのであるが、このターズというのがシュレンクのいうターズなのかプライロフスキーのいうウジヘに相当するのかはこの資料からは不明である。プライロフスキーの調査も日本海沿岸でのオロチとウジヘの境界を明確にただけで、ウスリー川に流れ込む支流の流域における詳しい住民の分布状況はアルセーニエフなどの調査を待たなくてはならなかった。そして先の4.4で触れたように、1927年～28年の調査によって、この問題はオロチとウデヘを区分するという形で決着し、ターズという名称と分類は民族学的な民族としても行政的な「民族」としても採用されなかった。

しかし、オロチでもウデヘでもなく、ターズという名称を自称する人々は現在まで沿海地方南部にごくわずかではあるが残っていて（沿海地方パルチザン地区ミハイロフカ村）、ソ連崩壊後それをアピールし始めている。彼らの言語を調査したことがある風間伸次郎によれば、彼らの言語は完全に中国語の一種であるという。しかし、彼らは漢字でそれを表記することはできない。そしてツングース系の言葉はわずかしか記憶されていない。風間はその調査の中で「娘」を意味する「ヤジガ」（ウデヘ語の「アジガ」に近い）という1語を採録している（風間 1996b: 23）。

最後にこの年の資料の特徴として触れるべき点は、従来の「サマギール」**Самагиры** という分類が消滅した点である。そこではゴリン川流域の住民も「ゴリド」**Гольды** に分類されている。ただし、シュレンクの述べるサマギールであるという注意書きが付記されている（Шумский 1911: 8）。パトカノフの指摘が既にその5年後に活かされたわけである。また、「キリ」という集団はもはやその名前すら登場しない。

1917年のロシア革命によって誕生した社会主義政権は、当初民族の対立は階級闘争の中に解消しようという立場から、民族政策には消極的であった。しかし、スターリ

ンが権力を握るようになると、彼は新生ソ連を多民族国家として統治することに決め、カール・カウツキの民族理論を援用した民族政策を採用する。その間の事情については田中克彦の著作（田中 1978）に詳しいのでここでは省略するが、その時シベリア、極東の先住民たちはブリヤート Буряты, タタール Татары, ヤクート Якуты, トゥヴァ Тувинцы, アルタイ Алтайцы, ハカス Хакасы, ショル Шорцы と「北方少数民族」народности Севера に分類され、さらに「北方少数民族」中に20を越える「民族」が設定された。つまり、ソ連政府は上記7つの「民族」をナーツィヤ、それ以外のシベリア・極東の先住民をナロードノスチと規定し、改めて「北方少数民族」の中で民族分類を行ったのである。本稿で扱っているアムール川下流域と樺太の先住民たちも「北方少数民族」に含まれて分類し直された。

ロシア革命後10年を経た1926年から28年にかけて行われた調査は、1926年から始まったソ連時代に入って初めての全国的な国勢調査であったとともに、帝政時代も含めて初めて行われたシベリア諸民族に関する総合的な学術調査の一環でもあった。その成果は前章4.4でも紹介した『1927年～28年におけるアムール川下流域の原住民の経済状態（1928年の調査資料に基づく）』（ТХНА 1929）と、『極東地方北部の国勢調査報告（1926年～27年）』（ウラジオストーク、1929年）Итоги переписи северных окраин дальне-восточного края（1926–1927 гг.）, Владивосток, 1929（ИПСО ДВК 1929）という形で発表されている。

それらの資料によれば、この調査でアムール川下流域と樺太に認められた「民族」あるいはナロードノスチは「ゴリド」Гольды, 「サマギール」Самагиры, 「ウリチ」Ульчи, 「ギリヤーク」Гиляки, 「オロキ」Ороки, 「オロチ」Орочи, 「ウデ」Удэ, 「ネギダール」Негидальцы, 「ツングース」Тунгусы, 「ヤクート」Якуты, 「アイヌ」Айны であった。この分類を1910年の調査と比較してみると気付くのは、「サマギール」が復活している点、シュレンク、バトカノフらのいう「オリチ」Ольчи が「ウリチ」Ульчи になっている点、そして、ブライロフスキーが「ウジヘ」と呼んで「オロチ」とは区別すべきであると提唱したウスリー川右岸の支流や沿海州南部の日本海沿岸の住民が、正式に「ウデ」Удэ という呼称で独立の「民族」と認められた反面、「ターズ」が呼称としても「民族」としても認められなかった点である。

第1の「サマギール」復活は1910年の調査よりも後退しているが、これは1927年～28年のカルゲルとコジミンスキーの調査までゴリン川流域での調査が十分でなかったことに起因する。したがって、カルゲルらの調査がゴリン川の住民はゴリド（ナーナイ）の1氏族であるという結論を出すことによって、最終的に「サマギール」を独立

民族とする考え方は消滅する。

第2の点も、自称に則って各「民族」の呼称を採用するという原則に従えば、一步後退である。「オリチ」から「ウリチ」へと第1音節が変わった理由は不明であるが、名称の性格自体には変化はない。先に4.3で指摘したように、「オリチ」、「ウリチ」という名称は19世紀中期の研究者の誤解に由来する名称であったが、結局、当時周囲のロシア人や研究者に完全に定着してしまったのであろう。

その後、スターリンの権力が確立された後の1937年に2回目の全ソ国勢調査が行われた。しかし、それは大粛清の真っ最中であり、その責任者たちがすべて粛清の犠牲となってしまう、その結果は公表されず古文書館の蔵の奥深くに極秘事項としてしまわれてしまった。そのために1939年に調査がやり直されたが、その翌年には独ソ戦が始まってしまった。そして、1945年までの戦争でソ連は甚大な被害を受けたために、その後1959年までの20年間国勢調査は実施できなかった。しかし、1939年の国勢調査ではシベリア・極東の少数民族に関しては、ほぼ現在の分類と名称が確立されたと考えられる。国勢調査は1959年の後は70年、79年、89年とほぼ10年ごとに全国的に行われており、各「民族」ごとの人口も集計され、公表されている。

ソ連時代の1930年代になると、シベリアの諸民族の公式名称が「自称を尊重する」という立場から次々に変更される。当該地域では、「ゴリド」Гольдыが「ナーナイ」Нанай、そして「ナーナイツィ」Нанайцы（本稿では「ナーナイ」という名称で統一している）に、「ギリヤーク」Гилякиが「ニヴヒ」Нивхиに、「ツングース」Тунгусыが「エヴェンキ」Эвенкиにそれぞれ変更され、「ウデ」または「ウデヘ」がロシア語風に「ウデゲイツィ」Удегейцыと呼ばれるようになった（これも本稿では「ウデヘ」で統一している）。結局、アムール川下流域、沿海地方、樺太の先住民たちは次のような「民族」に枠の中に固定されていく。すなわち「ナーナイ」Нанайцы、「ウリチ」Ульчи、「オロキ」Ороки、「オロチ」Орочи、「ウデヘ」Удегейцы、「ネギダール」Негидальцы、「エヴェンキ」Эвенки、「ニヴヒ」Нивхиの8「民族」である（各「民族」の分布は図13参照）。アイヌは1945年8月以降日本の樺太からの撤退とともに北海道に移住してしまっただとしてもはソ連の少数民族としては認められなくなる。オロキも登録人口が500人を切ったことから、1959年以降公表される国勢調査資料からは姿を消し、89年に復活する。

名称の確定とともに、民族の「民族」化が促進され、「民族」が民族を縛るようになる。住民は18歳になると成人として再登録され、パスポート（ソ連国内用）を支給されるが、その時所属する「民族」も申告する。しかし、自由に「民族」を主張する

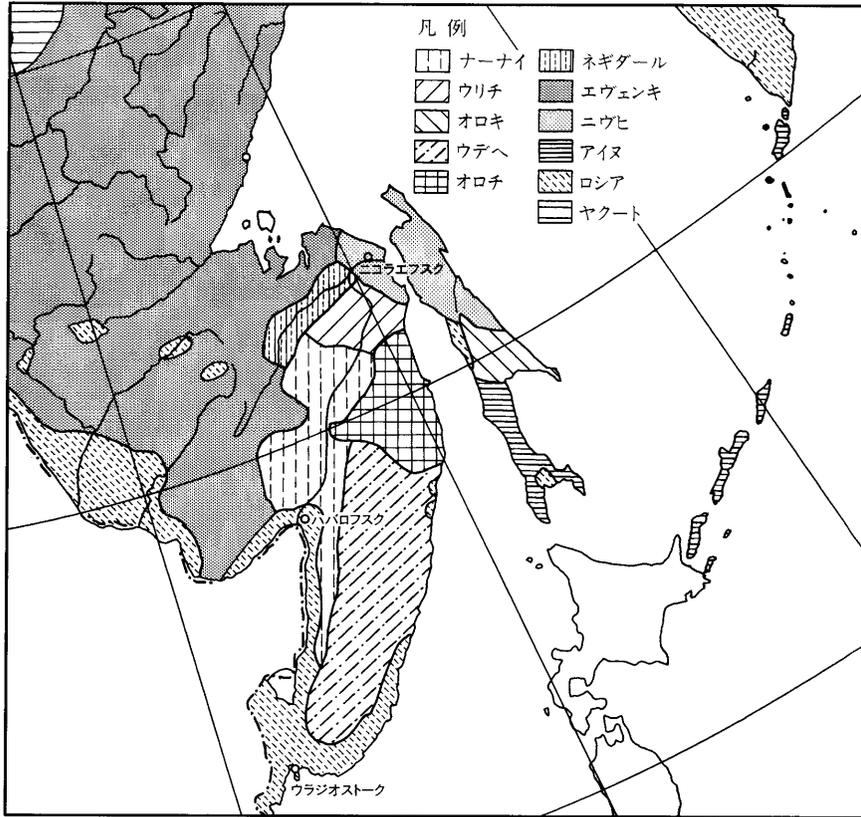


図13 1920年代、30年代の調査研究に基づいた19世紀末期～20世紀初頭の状況と想定された民族分布図 (Левин и Потапов 1961:6)

ことはできず、アムール川下流域と樺太の「少数民族」出身者であれば、上記の8「民族」のいずれかを選択しなければならなかった。そして、そのような制度、あるいは教育（ソ連時代1950年代までは固有言語教育、固有文化教育も盛んだった）を通じて、この8つの「民族」は当の人々の意識に定着し、次第に民族となっていく。

スモリャークはこの8つの「民族」の設定に関して2つの興味深い調査体験を紹介している。1つは、既に4.3でも触れたが、彼女が1947年に初めてウリチの調査を行った時、一度ならず「どうして我々のことをウリチと呼ぶのか」と尋ねられたというのである。しかもそれは老人、若者に関係なくあらゆる年代の人々からいわれた。彼女はそれで、このウリチという民族名称がこの人々の間で定着したことがなかったことを悟ったようである。しかし、その後この名称が正式に採用されて以来40年ほどたった1970年代には、既に人々の間に自然に受け入れられるようになっていた (Сомляк

1975: 36)。

もう1つはウリチの言語に関するコメントである。彼女は言語学者の間では1930年代までウリチ語をナーナイ語の1方言と扱っていながら(ペトロヴァ T. И. Петрова という言語学者の著書に、『ナーナイ語ウリチ方言』*Ульчский диалект нанайского языка*, Ленинград, 1936 という本がある), その後独立言語であるとされていると指摘した後、調査でのエピソードを紹介しながらこの問題に注意を喚起している。すなわち、彼女の調査では、下流に住むナーナイの人々の言語は同じナーナイ語とされている上流方面の方言よりもウリチの言語と互いに近いというのである。ただし、ウリチ語は別の言語であると意識されてはいるという。そして、実際に1958年に調査で訪れたカルギ村とシマン村(ともにゴリン川河口よりも下流にあり、ウリチとの境界地域にあった村。現在は廃村となっている一筆者)の老人たちが、ウリチ語は何不自由なくわかるのだが、ナーナイ地区のナーナイたちのいうことはなかなかわかりづらいと語っていたというのである。スモリャークは慎重を期して最後に「この問題については言語学者のさらなる調査が必要であると思われる」と締めくくっている(Смоляк 1975: 37)。

スモリャークはソ連民族学を代表するアムール地方の少数民族の専門家であり、それだけにソ連民族学の枠から飛び出すことはなかった。しかし、調査の際に目にする現実と、研究書や行政文書に書かれていることとのギャップから目をそらすことはせず、限界はあったが彼女なりに現実の方を直視する努力をしている。彼女のこの2つの調査エピソードは、現実の人々の民族的な意識と研究上の民族と行政上の「民族」との3者がそれぞれかみあっていなかったという事実を、オブラートに包みながらも、よく表しているといえるだろう。

彼女の苦し紛れともいえる遠慮がちな書き方にも表れているように、ソ連では民族学 этнография も言語学 языкознание も1930年代以降には行政が設定した「民族」の枠組みの中でしか研究を続けられなくなっていく。

第2次世界大戦の混乱期には研究者たちも前線に赴き、貴重な人材が失われたが、戦後1950年代になるとシベリア・極東での民族学的、言語学的なフィールドワークが再び盛んになる。1956年には30年代までの調査を集大成したようなシベリア・極東の先住民に関するハンドブック『シベリアの諸民族』*Народы Сибири* (1964年には *The Peoples of Siberia* というタイトルで英訳され、シカゴ大学から出版された)が出され(Левин и Потапов 1956; Levin and Potapov 1964), 1961年には彼らの物質文化を体系的にまとめた図録集『シベリア歴史アトラス』*Историко-этногр-*

афический атлас Сибири が出版された (Левин и Потапов 1961)。さらに1960年代から80年代にかけて、戦後の調査結果も踏まえた各民族ごとの民族誌が続々と出版された²³⁾。しかし、それらはいずれも行政的な「民族」を単位として記述、編集され、調査や文献研究で見つかる地域や言語集団ごとの差違は地域差あるいは方言差とみなされ、そのような集団は「民族」の下位分類と位置づけられた。スモリャークが述べているような実地調査で感じられる言語分類や文化の地域性 (文化領域) と「民族」分類との齟齬や違和感、ソ連崩壊後言語学者たちが盛んに取り上げるソ連の言語分類の問題点などはいずれも、研究が「民族」に縛られていたことに起因する。

ソ連民族学によるシベリア・極東先住民研究は、現在ではもはや記録することができない貴重なデータを記録し、それを体系的にまとめて出版したことで重要な役割を果たした。それはフィールドワークができないソ連以外の人類学者にデータを提供しただけではなく、後述のように、当の先住民たちが「固有文化」の復興を目指す際にも貴重な基礎データとなっているからである。しかし、「民族」に縛られた研究は必然的に「悪しき本質主義」となる。すなわち「民族」内の多様性を捨象したり、異なる地域集団の文化をコラージュして1つの「民族」文化を創り上げたり、社会主義の成果を誇示するためにことさら「伝統文化」の中から「未開」に見える部分を強調したりということが行われた。さらに重要なのは、ソ連民族学でも「全知の神のごとき人類学者 (ソ連の場合は民族学者一筆者) の声が住民の声を支配し、圧倒して」(杉島 1996: 202) いた点である。そして、権威を帯びた、ステレオタイプ化された「民族文化」が世に広まっていき、それが「少数民族」の人々に対する偏見と差別を助長する。結局、ソ連民族学といえども、1980年代後半に本格的に始まる人類学に対するポスト・モダン批判やオリエンタリズム批判から逃れることはできないのである。

ロシア、ソ連のような自らを「多民族国家」と規定している国家にとって「民族行政」は重要な課題である。その際にはまず「民族」というものを行政的に規定しなければならない。ソ連が崩壊した現在の時点で振り返れば、1920年代に盛んに行われた民族調査はソ連政府に新しい民族政策、民族行政を確立するための資料を提供するという目的を持って行われていたといえるだろう。そして、1930年代に行政的な「民族」が確立されて以降は、それを確認し、強化し、人々に啓蒙するために民族調査が行われ、モノグラフや民族誌が書かれていたといえそうである。行政的な「民族」は往々にして研究者の成果から都合のよい部分だけを選ぶことになるため、その設定は学術的な裏付けを持ちつつも、やはり政治的である。

既に1970年代にモートン・フリード M. H. Fried が、「部族」Tribe という概念は

国家への発展段階で必然的に生じるものではなく、国家統治の目的のために設定されるものであると述べたことがあったが (Fried 1975a; 1975b), 多民族国家における「民族」(ロシア語の *нация/народы/народность*) はまさにそれにあてはまる。現在当該地域に設定されている「ナーナイ」、「ウリチ」などの民族設定や名称が住民の意識を反映させていない側面があるのも、当該地域の「民族」という分類が国家統治の目的を持って設定されていたというところに起因している。

しかし、現在問題を複雑にしているのは、その政治的に設定された行政的な「民族」が人々の意識を規定し、民族と化しつつある点である。しかも、ソ連民族学、ソ連言語学が宣伝してきた本質主義的な「民族文化」、「民族言語」(固有言語)が彼らの民族意識の中核をなしつつある。そのために、ソ連民族学の民族誌の記述が必ずしも現実を忠実に写し取ったものではなく、本質主義的にかつ政治性を多分に含んだ構築物ではあるものの、それを虚構だと批判することが必ずしも正当ではない状況になっているのである。ことにソ連崩壊後、「少数民族」の出身者たちが固有の言語と文化の復興を主張する時、復興すべきものがソ連民族学や言語学によって再編された文化や言語であるというのが現実である。したがって、「民族」や「部族」は政治的に形成ないし設定されるものであるというのは簡単であるが、実際には研究と政治と当の住民自身の意識などが複雑に絡み合い、本稿でいう民族と「民族」を峻別することは実はほとんど不可能な状況になっている。

それは筆者自身の調査体験からも実証できる。例えば1998年の夏に行ったアムール川下流域の調査で、ウリチ地区にあるカリチョムという村(ボゴロツコエからウディリ湖という湖に入る水路の沿岸にある小村)でウリチの人々を相手に聞き取り調査をした際に、筆者が誤って「あなた方ナーナイは」と言ってしまった時、聞き取り相手をしてくれた人から、「我々はウリチだ」とたしなめられてしまった。ここには結婚相手の関係で住み着いているナーナイ出身者もいるが、現在はすべての村民がロシア語を母語としているために、言葉の上では彼となんら支障なく話ができる。しかし、このことで民族籍としての「ウリチ」、「ナーナイ」という区別が人々の間でかなり厳密に意識されていたことを思い知らされたのである。

また、アムール地方の先住民たちが自らの「民族文化」あるいは「固有文化」としてソ連時代に規定された本質主義的な一群の文化要素を保存、振興しようとしている点については、各村に必ず設置されている博物館あるいは資料館(多くは学校に併設されているが、少し大きな村では独自の建物を持っている場合もある)に展示されている標本資料に端的に表れている。そこで展示の中心に位置づけられるものは「伝統

的生活」としての狩猟・漁撈・採集用具であり、また「伝統的信仰」としてのシャマニズムや精霊信仰に使われる神像や精霊像、儀礼用具である。近年は先住民の歴史の見直しも始まりつつあり、筆者が主張してきたような中国や日本由来の生活用具や儀礼用具（中国製の陶磁器や日本製の漆器、あるいは中国や満洲の神々を描いた聖画像ミオなど）も展示されるようになってきている。しかし、それでも従来の民族学や人類学によって形成されてきた「未開の狩猟漁撈民」というイメージは根強く残されている（博物館展示におけるシベリア・極東先住民たちの文化表象の問題については佐々木（1998）で触れている）。

アムール川下流域の先住民たちの間で行政的な「民族」が彼らの民族的な意識を縛るようになった要因には、行政側や民族学者による宣伝や教育以外に、1960年代、70年代に行われた先住民の特定村落への集住化政策もある。当時ソ連では社会主義から共産主義への飛躍を図るために、従来の集団農場（コルホース колхоз）の規模を拡大したり、国営農場（ソフホース совхоз またはゴスプロムホース госпромхоз）に転換したりという政策が執られていた。既に1930年代に集団化が始まった際に、シベリアや極東の先住民の間では、遊牧民や漂泊民の特定村落への定住化がすすめられ、「ポジョーロク」 посёлок と呼ばれる定型化された行政村落が結成されたが、アムール川下流域や樺太の先住民のように集団化以前から定住的な生活をしてきた人々でも、昔からの自然村落とは別に、あるいはそれを再編する形で行政村が形成された。1960年代、70年代の集住化は有力な行政村を拠点として行われたため、人口がそこに集中した。例えば、現在人口2000人以上を数えるナーナイの中心的な村であるナイヒン村は、もともとはアヌイ川河口にあった小さな自然村であったが、行政村に指定されたことから、1930年代から60年代にかけて近隣の村落から人が集められて、人口が膨れ上がっていった。集められた村には近くの中州に浮かんでいたドンドン、タルゴンといった村の他、遙かアムール川の対岸のサヤン、マリンといった村々もあった。また、ウスリー川の有力な支流の1つであるビキン川流域のウデへの間でも、昔からの自然村とは別に、1959年にクラスヌィ・ヤールという行政村（パジョーロク）が形成され、1980年代までに流域の住民の大部分がそこに集められた。

そのような状況の中で、「民族」の境界にあった村の多くが廃村となり、「民族」ごとにとまとめられていった。例えばナーナイとウリチの境界にあったカルギ村、シマン村、イリ村などのナーナイは同じ村の中や近隣の村にいたウリチたちと日常的に接していたが、集住化に際して上流のニージニエ・ハルビ村 Нижние Халбы へと移り、ウリチも下流のカリノフカ村 Калиновка へと移住して、互いに遠く離れてしまった。

そして、その間にはロシア人移民の開拓村が点在するだけになった。同じことはウリチとニヴヒ（ギリヤーク）の間でも起きている。現在、ウリチの居住地で最も下流の村がウフタ村 Ухта とボゴロツコエ町 Богородское で、ニヴヒの最も上流の村はティール村 Тыр となっていて、その間にはやはり開拓民の村しかない。

そのような集団農場の国営化に伴う特定の行政村への集住化によって、先住民の村落の数が急速に減少するとともに、「民族」単位の集住が進み、その結果「民族」への帰属意識が否応なく高まったものと考えられる。そしてそれが今日の「民族」の民族化を引き起こし、また固有言語や伝統文化の復興運動もそれを基盤とせざるを得なくさせたといえるだろう。

1985年にソ連共産党書記長となったゴルバチョフが進めたペレストロイカ政策とグラスノスチ政策によって、「民族問題は存在しない」という公式見解に閉じ込められていたシベリア・極東の「少数民族」たちも深刻な「民族問題」の存在をアピールすることが可能となった。1989年には「北方少数民族」の権利を代弁し、また伝統的文化や伝統的な生活、あるいは固有言語を復興、振興させるための組織として「北方少数民族協会」Ассоциация малочисленных народов Севера といった組織も結成された（全国組織は結成後間もなくソ連崩壊のために休眠状態となるが、地方組織は今でも活発な活動を展開している）。

しかし、これらの運動においてもその単位となるのは「民族」の方であり、それを見直すという動きはごく限られている。例えば、カムチャツカ半島北部のコリヤークという「民族」の中にはケレク Кереки、アリュートル Алюторцы という集団があり、ソ連時代にはコリヤークの下位集団（あるいは方言集団）とされていたが、ペレストロイカ時代以降その独自性を強調し始め、少なくとも言語に関しては、独自の教科書作りを始めている。また、チュコトカ半島付け根にいたチュヴァン Чуванцы というグループもソ連時代にはユカギールあるいはチュクチに同化されたユカギールの一派とされていたのが、1989年の国勢調査報告から独立した「民族」として姿を見せるようになった。そして、そのような先住民側の主張に対して研究者が積極的に支援するケースも見られる。しかし、本稿で扱ってきたアムール川下流域や樺太にはそのような事例はまだ見られていない。先住民たちの民族意識はあくまでも「民族」を単位としている。

帝政ロシア時代から一貫して続けられてきたシベリア・極東の先住民の社会と文化に対する「未開」という定義付けと、「文明化」と称する介入、とりわけ1970年代以降の「開発」の進展と強力な生活文化のソ連化（事実上のロシア化）によって、現在

ではソ連時代以前に日常的に話されていた固有言語はほとんど使われなくなり、「伝統文化」も一部分を残してロシア的、ヨーロッパ的、あるいは全世界に共通の文化に取って代わられている。したがって、先住民たちはソ連時代を経験する以前の社会や文化、あるいは民族に戻れるわけではなく、ロシア語を話し、ソ連式の生活をしながら、「～族」という自己意識だけを持ち続けているのが実情である。

ソ連崩壊によって「ソ連人」というアイデンティティの創出が失敗に終わった結果、シベリア・極東の先住民たちは革命以前から持ち続けていた自己の所属する民族的集団へのアイデンティティを失うだけでなく、ソ連国家の国民としてのアイデンティティも失ってしまった。現在彼らに残されているのは、かつての民族的集団の外見をまとった行政的な「民族」である。彼らはそこにかつての民族的集団に対するのと同様のアイデンティティを求め、そのために、そこに様々な文化的装置を装備しようとする。しかし、その時残されているのは、ソ連時代に創られた本質主義的な「伝統文化」のセットや「固有言語」しかない。ソ連時代の政策を批判しようにも、求める「伝統文化」、「固有言語」がソ連時代に規定されたものしかないところに、現代のシベリアとロシア極東の「少数民族」のおかれた厳しい現実が表れている。それもアムール川下流域のように移民の海の中に先住民の集落が散在するような地域ではその傾向が特に強い。

6 結 論

前の3つの章において、19世紀中期に本格的な人類学的（民族学的）研究が始まって以来の、研究者が設定する民族と行政側が規定する「民族」との関係、そしてそれらと分類される住民の帰属意識との微妙な関係を明らかにしてきた。それを総括すると次のようなことがいえるだろう。

すなわち、1920年代までは19世紀の状況が生きており、4.6の最後に引用したスモリャークのことばのように、氏族（ハラ）、自然村（ガシャン）、そして河川流域やアムール川上での相対的な上流、下流といったことを基準とした小地域集団や方言集団などの帰属意識の対象となる集団が重層、錯綜していた状態で、民族も「民族」も当の住民には意識されていなかった。その一方でシュレンク以来民族学者や言語学者が実地調査に基づいて言語や住民自身の帰属意識などを基礎にして設定した民族学的（人類学的）な民族は、支配する人々を範疇化する「民族」として行政側に吸収されていった。この段階では、行政的「民族」は直接住民と接触することはなく、住民は

せいぜい移民たちが慣用的に使っている分類や研究者の民族分類を知る程度であった。

それが、ソ連の社会主義体制が確固たるものになる1930年代以降となると、その行政的な「民族」が研究者、移民、さらには住民自身をも拘束していくことになる。自然村は行政村に置き換えられ、氏族ハラは既に社会組織としての体をなしていなかった。かつての帰属意識の対象となる集団で残されたのは上流ナーナイ、下流ナーナイ、あるいはアムール川の支流やその他の河川の流域といった地域集団である。しかし、それらも行政的な「民族」の中に統合されて、「民族」単位の意識が強くなる。そして、その状況は社会主義体制を放棄した現在のロシア連邦でも変わらない。民族政策の点では「多民族国家」を標榜し、国民を「民族」単位で把握しようとしていることから、国家による民族の「民族」化のベクトルは消滅したわけでも、弱まったわけでもない。ソ連時代の間、研究者たちが提唱する民族は「民族」を追認するだけとなり、かつて見られた先住民と行政との仲介役としての研究者の機能は失われていた。

しかし、民族の「民族」化のベクトルが働いている間に、住民の間では「民族」がかえって意識の底に定着し、彼らはそれをよりどころに新たな民族意識を形成し、強化していた。それが社会の表面に噴出するきっかけを作ったのが、ゴルバチョフのグラスノスチ *гласность* (情報公開政策) だった。1989年ごろから活発になったシベリア・極東地域における「少数民族」たちの民族意識の高揚、権利回復の主張、固有

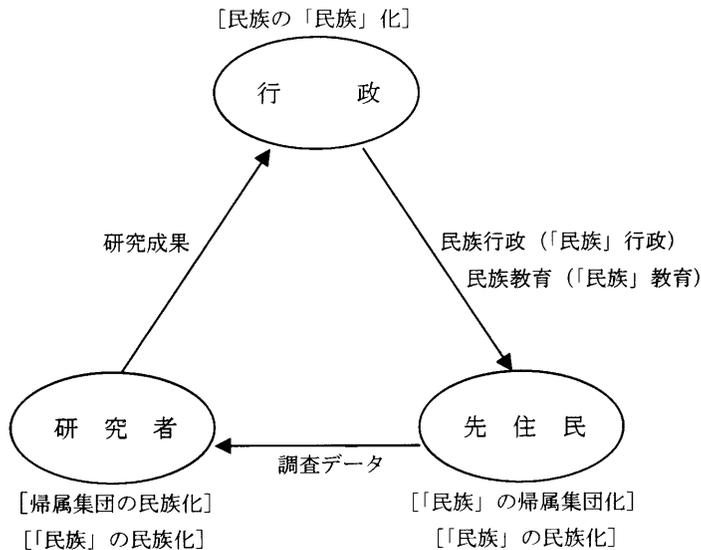


図14 民族と「民族」の設定をめぐる先住民・研究者・行政の3者間関係模式図

文化と固有言語の復興や活性化などを目指す運動は、すべて意識に定着した「民族」を単位に行われた。すなわち、「民族」が民族と化しつつあるのである。その中で研究者の対応も徐々に変化しつつあり、政策追認から政策提言へ、つまり先住民と行政との仲介を住民側に立って行おうという風潮が強くなっている。

このような住民の民族的な意識と学術的な民族、そして行政的な「民族」という3者関係の変化の背景にあるのは、住民、研究者、そして行政の間の情報の循環である。それを模式的に表すと図14のようになる。

しかし、このような3者間関係はロシア、ソ連だけに特有のものではなく、また、人類学的（または民族学的）な研究が介入することによって初めて生じるものでもない（つまり、研究者や調査者が人類学者や民族学者である必要はない）。

人類学という自らと異なる集団（異文化集団、あるいは異民族）を中心に研究する学問分野が成立する以前から、そのような集団の文化的特徴を描くことは世界各地で行われてきた。アムール川下流域や樺太の場合でもロシア、ソ連だけでなく、そこを統治しようとした王朝中国も幕藩体制下の日本も同じであった。そしてその時には必ず、調査される人々（調査対象）と調査する人々、そして調査する人々を派遣し、そのデータを活用して調査対象を分類整理しようとする人々（あるいは部署）の3者間関係が生じた。清朝のアムール支配の場合には、調査対象がアムール地方の地元住民であり、調査者は王朝から派遣された役人や流刑となって東北地方に留められた文人などである。そしてその報告をまとめて調査対象とされた人々を分類整理するのは、地方の拠点都市や北京にいる文書編纂を専門とする人々である。江戸幕府の場合も調査者は幕府が派遣した役人であり、それを整理するのは派遣された役人自身の場合もあるが、やはり江戸にいるより上位の役人や文書編纂を専門とする人々である。この図式は異文化集団を支配しなくてはならなかった国家にとっては共通のようで、近現代の欧米では異文化の調査・研究に関する専門的訓練を受けた人類学者や民族学者がその調査役に就いていたにすぎないともいえる。

そしてこの3者は住民分類においても相互に影響しあう。基本的にはロシア、ソ連の行政が民族学者の成果を吸収したように、編纂する者は調査者のデータを吸い上げながら自ら解釈する。しかし、その分類方法が一度確立されると、今度は派遣される役人や調査者がそれに基づいて住民に接するようになる。そうすると住民側も行政側にそのように分類されていることを知るようになり、それが次第に彼らの意識を拘束する。まさにソ連時代に起きたことと同じことが起こりうるのであり、図14の模式図に表されたような現象は実際清朝支配時代のアムール川下流域で起きていたのである。

住民の分類方法は当然分類しようとする編者によって異なる。したがって、時代も編纂された国も異なる文書類を駆使して、1つの地域の住民の歴史を明らかにしようとする場合、まず、各史料の編者がいかなる基準でもって人々を分類しているのかという点に着目しておかなくてはならない。そして、できればそのデータがいかなる調査によって得られたものなのか、より具体的には、専門の調査官の報告か、駐留した軍隊の報告か、あるいは拠点都市に連れてこられた住民自身の語るところを記録したものかなどについても知っておく必要がある。

しかし、被調査者、調査者、そして編者または行政の3者間の関係が一種の環をなして、相互に影響しあう、あるいは国の政策や研究の方法論によってこの3者の距離が規定されるという点については、ソ連、ロシアの事例だけでなく、どの地域、どの時代でも共通なのである。少なくとも、本稿で扱ったアムール川下流域と樺太からなるロシア極東南部に関しては時間を越えて共通している。したがって、本稿で行った分析と結論は現在の先住民たちの民族意識の問題のみならず、歴史時代におけるこの地域の住民たちの社会的、文化的実像を復元する際にも、基本的な方法論を提供するものと期待できる。すなわち、1980年代までの歴史学や人類学、民族学が行ってきたような、19世紀後半から20世紀初頭に書かれた民族誌を絶対的な基準として歴史時代を語るような誤りを否定し、史料を編纂した者、調査データを提供した者、そして調査され、記述された者との関係を史料批判から解き明かしつつ、そこに描かれた人々の実像を浮かび上がらせるような研究を可能にするのである。

今後の課題となるのは、清朝時代の史料に登場する現在のアムール川下流域と樺太の先住民たちが直接の祖先と考えている人々の実像を、本稿での方法を援用しながら明らかにすることである。それにより、過去の実態が明らかにされるとともに、民族誌に描かれた姿や現在の姿を歴史的に相対化することができるのである。

注

- 1) アムール川流域と樺太の地名はロシア、日本、中国によってそれぞれ異なる名称で呼ばれている。例えば、アムール川は中国側では黒龍江と呼ばれ、樺太はロシアではサハリン島 *Остров Сахалин*、中国では庫頁島と呼ばれる。本稿では基本的に現在領有している国の名称を優先的に使用する。ただし、サハリン島とクリル諸島 *Курильские острова* は現在ロシア領ではあるが、日本との歴史的なつながりが強いことから、日本風に樺太、千島列島と呼ぶ。また、中国とロシアの国境をなしているアムール川 *Река Амур* とウスリー川 *Река Уссури* は中国側では黒龍江、烏蘇里江と呼ばれるが、本稿ではアムール川、ウスリー川と呼ぶことにする。それに対して松花江はロシアではスングアリー川 *Река Сунгари* と呼ばれるが、これは河口まで中国領であることから中国式の名称で呼ぶことにする。

- 2) 呂光天によれば中華人民共和国成立後、内蒙古自治区では「呼倫貝爾盟民族委員会拡大会議」が開かれ、その席上で「索倫」、「通古斯」、「雅庫特」という名称の問題が討論された。その中で、多くの事実よりこの3つのグループが本来は「鄂温克族」という1つの民族であるということが証明され、彼らの要求にしたがって政府が彼らを1つの民族として認定し、「鄂温克」という本来の名称を採用したのだという(呂 1983: 4)。
- 3) エヴェンキの言語と民族の研究で知られるヴァシレーヴィチ Г. М. Василевич によれば、従来ツングース Тунгусы, ラムート Ламуты と呼ばれていた北方ツングース諸民族の正式呼称としてエヴェンキ Эвенки, エヴェン Эвены という今日の名称が公式に採用されたのは1931年である(Василевич 1969: 7)。
- 4) この本は戦前1944年に既に「北方産業研究所」というところが翻訳編集して出版している。また、戦後1972年に『季刊ユーラシア』No. 5, 6, 7 にその一部が転載された。本稿ではこの転載された訳文を資料としている。
- 5) 「欺勒爾」という表記もある。清の康熙帝の時代を記録した『聖祖実録』の1661年(順治18年)の項に「奇勒爾地方騫馬爾姓」が朝貢に応じたという記事がある(清実録 1985: 70)。
- 6) 当時ロシア帝国の支配下において、キリスト教に帰依していない人々は「異民族」инородцы と規定された。
- 7) ダウール語は現在モンゴル語の一派とされていることから、シュレンクが彼らをツングースの仲間に入れたのは誤りである。しかしシュレンクが調査した時代、ダウールたちは文章を書くのに満洲文語を使い、ダウール語の語彙に多くの満洲語の言葉が混入していたことから、彼の判断もあながち間違いであると断ずることはできない。
- 8) ギリヤークの居住地や活動地域がジャンタル湾沿いにかなり北西の方面に伸びていたことは、シュレンク以前より指摘されていた。それはロシアがウダ川河口にウドスク要塞を築いてツングース系住民の支配と清朝に対する国境警護に当たっており、ロシアの探検家たちがジャンタル湾沿いに南下してトゥグル川流域やさらに東の方にも足を伸ばして、ギリヤークたちに遭遇していたからである(Таксами 1967: 7-8)。また、1805年のフヴォストフ、ダヴィドフらによるエトロフ島襲撃事件で捕虜にされ、オホーツクに収監されていた中川五郎次も、1807年に脱走した際にはウドスク要塞の近くやトゥグル川河口付近でツングースとともにギリヤーク(「ゲレヤカ」)にも会っている。その冬彼はギリヤークのトリコノという人物の世話になり、そのまま春を待ってアムール方面から来るギリヤークたちとともに清側に逃れようとしたが、ウドスク要塞から来たロシア兵たちに連れ戻されてしまった(中川 1994: 518-529)。
- 9) 確かに北方ツングース系の言語では飼育トナカイを「オロン」орон と呼ぶが、オロキ(ウイльта)は「ウラ」ула と呼んでいた。他にエヴェン語、ナーナイ語、ウリチ語でも「オロン」орон, ウデへ語では「オロ」оро, オロチ語では「ウラ」ула または「オラ」ола と呼んだ(Василевич 1958: 327)。
- 10) 後のロシア、ソ連の民族学者はウリチャ Ульча またはウリタ Ульта とする。これらは現在日本で広く受け入れられた名称である「ウイльта」Uilta と同種の自称である。
- 11) これは重要な指摘である。後に詳述するように、シュレンクがオロチと呼んだ人々のうち、大部分がウデまたはウデへと自称する人々だったことが判明するが、ウデ、ウデへという名称は、13世紀ぐらいから17世紀までスイフン川から牡丹江の流域にいたとされるウディグ(朝鮮語ではウディゴ)と呼ばれた人々と共通する。彼らのほとんどは16世紀末期から17世紀初頭にヌルハチの台頭に始まる清朝成立の過程の中で満洲の一部に組み込まれて行くが、北へ逃れた者やウスリー川支流の奥深くにいた同族たちの子孫がシュレンクによってオロチという名で呼ばれたという可能性も生じるのである。
- 12) ラペルーズはデ・カストリ湾で南から船でやって来たという「ビチ」Bitchiy と呼ばれる人々に会っている。彼らについて、シュレンクはビチュ Бичу という村から来たゴリドではないかと述べているが(Шренк 1883: 143-144)、ラペルーズの著作の翻訳者小林忠雄はその注で、「タタール海峡の西岸、北緯四九度四九分、東経一四〇度三二分(グリニッジ)にある Bitchy 岬付近に住む住民か」と述べている(ラペルーズ 1988: 250)。
- 13) ここはロシアの港がおかれ、インペラートルスカヤ・ガヴァニ(皇帝湾) Императорская гавань と呼ばれていたが、革命後ソヴィエツカヤ・ガヴァニ(ソヴィエト湾) Советская гавань と改名された。
- 14) 「マンズ」はおそらく「満子」、「ターズ」は「韃子」である。ともに漢語で満洲や北方の異

民族を貶めた呼称の1つである。

- 15) ドンドン川のこと。現在はアヌイ川 **Ануй** と呼ばれる。その河口近くにある村**ナイヒン Найхин** は現在では人口2000人近くを擁するナーナイの中心村である。ナイヒンという村名はこのナイへ川に由来するのかもしれない。ちなみにやはりこの川の河口近くにドンドン島という島があり、ドンドン川という名称はこの島名と関係があるのかもしれない。この島にはドンドンという同名の村があったが、住民はソ連時代にナイヒンに移住した。岸边にあった村の跡は、その後アムール川の増水のために現在は川底に沈んでいる。
- 16) 17世紀末ぐらいまで三つ編みにしたお下げの周囲を剃るという満洲特有の弁髪は現在のロシア領のナーナイ、ウリチの分布域までは普及していなかった。それは揚賓の『柳辺紀略』巻3に登場する「不剃髪黒金」という表現に現れている。それに対して「剃髪黒金」と呼ばれる人々も登場するが、彼らは満洲式の弁髪を結っており、大体松花江の河口あたりからウスリー川の河口までのアムール川本流沿いとウスリー川の下流にいたと考えられている（揚賓 1985: 251）。
- 17) ちなみにマークは「オルリキ」の語源について、「コザックが当時この地方のツングース族に「オルリキ」という名称を与えたのは、おそらく彼らがいつも自分たちの住居の中に手飼いのアヨール（鷲）を飼っていたからであろう」と述べている（マーク 1972: 196）。彼はロシア語の鷲を意味する **орёл** と **Орлики** が音的に近いことと、アムール川下流域の住民の間で鷲などの猛禽を飼うことが盛んであることとを結びつけているのである。したがって、彼の説では「オルリキ」という名称はロシア人による他称になる。
- 18) シュレンクは、彼らが何者かとの問いに対して、オリチは「ブ マングー ネイ」**Бу мангуней**、ゴリドは「ブ マングー ナイ」**Бу мангунай** と答えることが多いが、これはともに「我々はアムール川の住民である」という意味だと述べている（Шренк 1883: 148）。ただし、シュレンクが紹介しているこの表現はゴリド語でもオリチと隣接しているような下流方面の方言である。上流方面ではアムール川のことを「マンボー」**Манго** と発音することから（Оненко 1980: 257）、「ブ マンボー ナイ」**Бу мангонай** となるはずである。
- 19) 筆者はこのオリチとゴリドの境界に疑問を抱いている。確かに、マークもゴリン川河口を過ぎると民族はゴリドからマンゴン（オリチ）に変わると述べているが、彼らの調査と全く同じ時代の安政3年（1856年）に大陸からやって来たサンタン商人たちからアムール川の村々について樺太で聞き取りを行った幕府の官吏たちは、アジ村よりも遙かに下流の「ヨレー」（シュレンクは「イリ」**Ырри** とする）という村から「サンタン」に替わって「コンテツケ」という「毛坊主」が住んでいると報告している（東京大学史料編纂所 1972: 128）。コンテツケは間宮林蔵のいうコルデツケのことで、「ゴリド」の項目で触れるように、シュレンクのゴリドと同じ語源の名称である。しかも「毛坊主」というのは前頭部を剃って、弁髪を結っていることを意味しており、その名称とともに、彼らがシュレンクのいうゴリドと同じ文化を持つ人々であった可能性が高い。
結局ゴリン川河口からジャイ岬（現在のソフィースク）までのアムール川本流沿いはゴリドとオリチの混住地帯であり、そこに明確な境界を求めるのは不可能である。バトカノフが作成したツングース諸民族の分布図でもこの地域はゴリドとオリチの混住地域とされている（Патканов 1906: 折込地図）。1897年の国勢調査ではその間にはゴリドだけの村、オリチだけの村の他に、両者がともに住む村（左岸のパフタ **Пахта**、右岸のボリバ **Больба**、**Анган**）もあった。同じ調査によればオリチが住む最も上流の村は左岸ではシダヒ **Сидахи**、右岸ではディレン **Дырен** であり、マークやシュレンクの指摘よりも若干下流に寄っている。また、シュレンクがオリチの最も上流の村と位置づけたアジ村は1897年の調査ではゴリドの村とされ、そのほとんどがゲイケル氏族であった（人口87人の内82人）（Патканов 1912: 961-968）。
- 20) シュレンクはこのギリヤークの呼称が間宮林蔵の報告に出てくる「イダー」という名称の元の形であると考え（Шренк 1883: 158）。
- 21) このうち現在まで残っているのはコンドンカすなわちコンドン **Кондон** だけである
- 22) 1920年代に調査に入ったラティモア **O. Lattimore** によれば、当時松花江流域にいた「赫哲族」（松花江ナーナイ）には **Bildaki, Futar**（または **Maranka**）、**Gekir, Kilen, Kumara, Luir, Mengjir, Shumuru, Udhingke** などの氏族（ハラ）が確認されている（Lattimore 1933: 47）。また、同じ時代に松花江に調査に入った凌純声と泉靖一・赤松智城はそのうち6つを再確認している（凌 1934: 224; 泉・赤松 1938: 23）。その中にはクル・ウルミ水系にいた氏

族と共通する Udhingke と Kilen (凌と泉らは juk'əŋ hala または Yukala-hala という名称で採録している) も含まれる。しかし、言語研究では氏族と方言との対応関係についての研究はなされていない。

- 23) 例えばヴァシレーヴィチの『エヴェンキ』, タクサミの『ニヴヒ』, そしてスモリャークの『ウリチ』などがある (Василевич 1969; Таксами 1967; Смоляк 1966)。

文 献

赤松智城・泉靖一

1938 「赫哲族踏査報告」『民族学研究』4(3), 384-405。

秋月俊幸

1994 『日露関係とサハリン島——幕末明治初年の領土問題』東京: 筑摩書房。

Albert, F.

1956 *Die Waldmenschen Udehe*, Darmstadt.

安 俊

1986 『赫哲語簡志』(中国少数民族語言簡志叢書) 北京: 民族出版社。

Атлас СССР

1984 *Атлас СССР*, Москва: Главное управление геодезии и картографии при совете министерств СССР.

Barth, F.

1969 Introduction. In F. Barth (ed.) *Ethnic Groups and Boundaries*, pp. 9-38. Boston: Little, Brown and Company.

Бичурин, И.

1822 *Статистическое описание Китайской Империи*, ч. II, (Статистическое описание Маньчжурии, Монголии, Восточного Тюркстана и Тибета), Санкт Петербург: Издание императорской академии наук.

Браиловский, С.

1901 Тазы или удинэ, *Живая старина*, 11(II), 129-216; 11(III), 323-432.

Du Halde

1735 *Description géographique, historique, chronologique, politique, et phisique de l'Empire de la Chine et de la Tartarie chinoise*, vol. 2, Paris

Fried, Morton H.

1975a The myth of tribe, *Natural History* 84(4), 12-20.

1975b *The Notion of Tribe*, California: Cumming Publishing Company.

洞 富雄

1973 『北方領土の歴史と将来』東京: 新樹社。

井上紘一

1987 「民族」石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男編『文化人類学事典』pp. 749-751, 東京: 弘文堂。

ИПСО ДВК

1929 *Итоги переписи северных окраин дальне-восточного края (1926-1927 гг.)*, Владивосток.

カルゲル (富田良作訳)

1944a 「サマギール族に就いて (上) ——ガリン河流域の住民の氏族構成に関する報告書」『書香』16(1), 34-46。

1944b 「サマギール族に就いて (下) ——ガリン河流域の住民の氏族構成に関する報告書」『書香』16(2), 53-64。

Каргер, Н. К. и Козьминский, И. И.

1929 *Гарино-амгунская экспедиция 1926 года*, (Известия комиссии по изучению племенного состава СССР и сопредельных стран 3), Ленинград: Издательство Академии Наук СССР.

- 川田順造
 1995 「民族」梅棹忠夫監修，松原正毅・NIRA編『世界民族問題事典』pp. 1116-1119，東京：平凡社。
- 川田順造・福井勝義編
 1988 『民族とは何か』東京：岩波書店。
- 風間伸次郎
 1996a 「ヘジェン語の系統的位罫について」『言語研究』109, 117-138。
 1996b 「ターズをたへずねてみたら」『ユーラシアホットライン』9, 23-24，東京：ユーラシアクラブ。
 1997 「ツングース語の方位名称について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』6, 113-124。
- ラペルーズ（小林忠雄編訳）
 1988 『ラペルーズ世界周航記——日本近海編』東京：白水社（Lapérouse F. G., 1797, *Voyage autour du monde de Lapérouse*, 4 vols, rédigé par Milet-Mureau, Paris: L'Imprimerie de la publique）。
- Ларькин, В. Г.
 1964 *Орочи (историко-этнографический очерк с середины XIX в. до наших дней)*, Москва: Издательство «Наука» .
- Lattimore, O.
 1933 The Gold Tribe, "Fishskin Tatars" of the Lower Sungari, *Memoirs of American Anthropological Association* 40, 1-70.
- Леонтович, С.
 1897 Природа и население бассейна реки Тумнина, *Землеведение*, том IV.
- Левин, М. Г. и Потапов, Л. П. (ред.)
 1956 *Народы Сибири*, Москва и Ленинград: Издательство Академии Наук СССР.
 1961 *Историко-этнографический атлас Сибири*, Москва и Ленинград: Издательство Академии Наук СССР.
- Levin, M. G. and L. P. Potapov (eds)
 1964 *The Peoples of Siberia*, Chicago: University of Chicago Press.
- 凌純声
 1934 『松花江下游の赫哲族』南京：国立中央研究院歴史語言研究所。
- 呂光天
 1983 『鄂温克族』北京：民族出版社。
- マーク, R. K. (北方産業研究所編訳)
 1972 「アムール河流域民族誌」『季刊ユーラシア』5, 65-91; 6, 125-152; 7, 167-223 (Maak R. K., 1859, *Путешествие на Амур, совершенное от Сибирского отдела Императорского Русского Географического Общества*, Санкт Петербург: Издание императорской академии наук)。
- Маак, R. K.
 1859 *Атлас к путешествию на Амур, совершенному от Сибирского отдела Императорского Русского Географического Общества*, Санкт Петербург: Издание императорской академии наук。
- 間宮林蔵
 1988 「東韃地方紀行」洞富雄・谷澤尚一編注『東韃地方紀行』pp. 115-165，東京：平凡社。
- 満鉄弘報課（南満洲鉄道株式会社・弘報課）
 1942 「ネヴェリスコイのアムール開拓」南満洲鉄道株式会社・弘報課編『東韃紀行』pp. 283-400，東京：満洲日日新聞。
- Миллер, Г. Ф.
 1757a Изъяснение сумнительств находящихся при поста границ между Российским и Китайским государствами 7197 (1689) года, *Ежемесячные сочинения к пользе и увеселению служащих*, Апрель 1757 г., Санкт Петербург: Императорская Академия Наук.
 1757b История стран на реке Амуре лежащих, когда оныя состояли под Российским

- владением, *Ежемесячные сочинения к пользе и увеселению служащих*, Июль, Август, Сентябрь и Октябрь 1757 г., Санкт Петербург: Императорская Академия Наук.
- 中川五郎次
1994 「五郎次申上荒増」秋月俊幸翻刻・解説『北方史史料集成』第5巻, pp. 495-563, 札幌: 北海道出版企画センター(成立は文化9年[1812年])。
- 中村小市郎
1801 『唐松の根』大阪大学壤徳堂文庫本(刊本: 1987「唐太雑記」高倉新一郎編『犀川会資料全』pp. 597-650, 札幌: 北海道出版企画センター)。
- Оненко, С. Н.
1980 *Нанайско-русский словарь*, Москва: Издательство «Русский язык».
- Патканов, С.
1906 *Опыт географии и статистики тунгусских племен Сибири на основании данных переписи 1897 г. и других источников*, часть II, прочие тунгусские племена, (Записки императорского русского географического общества по отделению этнографии, том XXXI, часть II), Санкт Петербург.
1912 *Статистические данные, показывающие племенной состав населения Сибири, язык и роды инородцев*. (на основании данных специальной разработки материала переписи 1897 г.), том III. Иркутская губ., Забайкальская, Амурская, Якутская, Приморская обл. и о. Сахалин. (Записки императорского географического общества по отделению статистики том III, вып. 3), Санкт Петербург.
- Петрова, И. И.
1936 *Ульчский диалект нанайского языка*, Москва и Ленинград: Издательство Академии Наук СССР.
- 清実録
1985 『清実録』四(「聖祖仁皇帝実録」一), 北京: 中華書局。
- Россохин, И. И. Леонтьев, А.
1784 *Обстоятельное описание происхождения и состояния маньчжурского народа и воиска в восьми знаменах состоящего*, Санкт Петербург: Издание императорской академии наук.
- РГИА ДВ (Российский государственный исторический архив Дальнего Востока)
ф.1 оп.1 д.450 л.25-27 Статистические сведения, о числе городов и селении в Софийском округе и о населении оногo, 1 января 1873 года.
ф.1 оп1 д413 л.53 Ведомость, население города Софийска и Софийского округа по сословиям по статистической переписи 1873 года.
ф.1 оп1 д413 л.81 Ведомость, население Николаевского округа Приморской области по сословиям, по статистической переписи 1873 года.
- 三姓副都統衙門滿文檔案訳編
1984 『三姓副都統衙門滿文檔案訳編』(遼寧省檔案館・遼寧社会科学院歴史研究所・瀋陽故宮博物館訳編) 瀋陽: 遼瀋書社。
- 佐々木史郎
1995 「『少数民族』の重層性」『民博通信』70, 28-43。
1998 「シベリア・極東先住民のエスニシティと文化表象——地方博物館の展示をめぐる」田畑伸一郎編『スラブユーラシアの変動——自存と共存の条件』(平成9年度重点領域研究公開シンポジウム報告集) pp. 59-71, 札幌: 北海道大学スラブ研究センター。
- Шимкевич, П. П.
1896 *Материалы для изучения шаманства у гольдов*, Записки приамурского отдела русского географического общества, том II, вып. 1. Хабаровск: Типография канцелярии приамурского генераль-губернатора.
- シロコゴロフ, S. M. (川久保悌郎・田中克己訳)
1941 『北方ツングースの社会構成』東京: 岩波書店 (Shirokogoroff S. M., 1933, *Social Organization of the Northern Tungus*, Shanghai)。

- Шренк, Л. И. (Schrenck, L. von)
 1881 *Reisen und Forschungen in Amurlande in den Jahren 1854–1856*, Bd. 3, Die Volker des Amurlande, 1, St. Petersburg.
 1883 *Об инородцах амурского края*, том 1, Санкт Петербург: Издание императорской академии наук.
- Штернберг, Л. Я.
 1933 *Гиляки, орочи, гольды, негидальцы, айны*, статьи и материалы под редакцией с предисловием Я.П. Алькор (Кошкина), Хабаровск: Дальгиз.
- Шумский
 1911 *Сведения о туземных инородцах, проживающих в Приморской Области*, Владивосток: Типография приморского областного правления.
- Смоляк, А. В.
 1966 *Ульчи, хозяйство культура и быт в прошлом и настоящем*, Москва: Издательство «Наука»
 1975 *Этнические процессы у народов нижнего Амура и Сахалина*, Москва: Издательство «Наука»
- 杉島敬志
 1995 「人類学におけるリアリズムの終焉」合田清・大塚和夫編『民族誌の現在——近代・開港・他者』pp. 195–212, 東京: 弘文堂。
- Таксами, Ч. М.
 1967 *Нивхи (современное хозяйство, культура и быт)*. Ленинград: издательство «Наука», Ленинградское Отделение.
 1975 *Основные проблемы этнографии и истории нивхов, середина XIX-начало XX в.*, Ленинград: Издательство «Наука», Ленинградское Отделение.
- 田中克彦
 1978 『言語から見た民族と国家』東京: 岩波書店。
- ТХНА
 1929 *Туземное Хозяйство низовьев Амура в 1927–1928 году (по материалам обследования 1928 года)*. Хабаровск и Браговещенск: Издание дальхотсоюза и далькрайсоюза.
- 東京大学史料編纂所編
 1972 『大日本古文書——幕末外国関係文書之二十』東京: 東京大学出版会 (初版は1930年, 東京帝国大学編, 東京帝国大学文学部史料編纂所発行)。
- Василевич, Г. М.
 1958 *Эвенкийско-русский словарь*, Москва: Государственное издательство иностранных и национальных словарей
 1969 *Эвенки, историко-этнографические очерки (XVIII-начало XX вв.)*, Ленинград: Издательство «Наука», Ленинградское отделение.
- Васильев, В. П.
 1857 *Записки о Нингуте, Записки императорского географического общества*, том XII, Санкт Петербург.
- 和田 清
 1942 「支那の記載に現はれたる黒龍江下流の原住民について」『東亜史論叢』pp. 454–506, 東京: 生活社 (初出は『東亜学』第1輯, 1939年)。
- 楊 賓
 1985 「柳辺紀略」『影印遼海叢書』一, pp. 235–271, 瀋陽: 遼瀋書社。
- 吉田金一
 1974 『近代露清関係史』東京: 近藤出版社。
- Зоротарев, А. М.
 1939 *Родовой строй и религия Ульчей*, Хабаровск: Дальгиз.